

沖縄県立博物館紀要

第 10 号

1984

沖 縄 県 立 博 物 館

目 次

多和田真淳調査収集の考古資料（Ⅲ）	多和田 真淳・知念 勇	1
沖縄群島の両生爬虫類相（Ⅲ）	当山昌直	25
山内盛彬旧蔵「御屏領野村工工四」について	宜保栄治郎	37
<資料紹介>		
辞令書等古文書調査報告補遺（二）	上江洲 敏夫	1

多和田真淳調査収集の考古資料 (Ⅲ)

多和田真淳・知念 勇

運天貝塚

発見年月日 発見者不明

今帰仁村字運天白間原にある沖縄編年前期から後期にまたがる遺跡群である。運天の北方・古宇利島に対面する海岸崖下にある東汲川の泉を中心として遺物が散布する。

1969年新田重清氏等によって、試掘調査が行なわれている。その資料の一部を多和田が今帰村史に紹介した。^{注1}新田氏によると「土器の分布は、泉を中心に崖上の台地、崖下の畠地及び海岸の防潮林近くまで広範囲に及ぶ」とある。^{注2}

この貝塚最下層から出土した、口縁部に4条の細刻線をめぐらし、細線上に刺突文を施した深鉢形の土器を多和田は運天式と命名した。

採集品には土器、石器、貝製品があり、土器は無文の胴部をのぞき、報告する。

土器

第1図1～9の口縁部9個と第2図10～35の底部25個がある。図1の1は口縁部が外反し、胴部が内傾する深鉢形の土器で、胎土には石英、砂粒等を混入する。外面は黒色で内面が褐色をなし、口頸部には製作時の指頭圧がみられるが文様はない。内外面に荒い擦痕を残す。口径推算23.3厘、器厚は胴部で6粂で焼成良好。

図1の2は、口縁部がかるく外反する深鉢形で、1同様胴部は内傾する。外面下端部は褐色で上部が黒色、内面は一様に褐色となる。口頸部に山形沈線文が一条めぐらされている。口径15.3厘、器厚5粂、胎土には石英と赤褐色の粒が混入、器色は内面褐色外面黒色である。

図1の3は器形、胎土は1に同じであるが器面は表裏面とも黒色で、軟質でもろい感じの土器である。

図1の4は器形は1に近い深鉢形の土器で、外反する口縁部から胴部への移行部分が外側へ盛り上っている。胎土には石英、砂粒等が混入するが表面調整が良好なため、精選された胎土である。外面上部は黒色、下部が褐色、内面部は黒色、上部は褐色である。

図1の5は外反する平口縁の深鉢形土器、胎土には石英粒、石灰岩粒、黒色の鉱物質粒、赤色粒が混入している。内外面とも均一に黄褐色を呈するがもろい感じのする土器である。

図1の6と7は壺形の土器で、同6は口径6.8厘。長頸で胴部に膨みをもつ小形の壺である。胎土及器色は5と同様であるが焼成は良く硬い土器である。

図1の7は小破片のため口径は不明、胎土には少量ながら石英粒が混入。焼成が良く精選された緻密な感じの土器である。外面は黒色であるが全体的に淡黄色を呈する。外面に擦痕状の調整痕を残している。

(★たわだ しんじゅん 那覇市史編集委員)
(★★ちねん いさむ 県立博物館主任学芸員)

図1の8は口縁部が外反する深鉢形土器で口縁部は平坦になり、胎土には石英粒、砂粒が多く含まれる。器の表面が剥離しているため手ざわりがザラつく感じである。外面は黒色で内面赤褐色の脆弱な土器である。

図1の9は口縁が外反する壺形の土器で、口縁部が外面へ折り曲げられている。口径部から口縁部にかけて、幅6粂の凸帯文が鞍状にはりつけられている。外面暗黒色で、胎土及混入物は8に類似する。

底部は図2の10～35の25個あるが、第31・35の2点をのぞいては、すべて、くびれ平底である。

図2の10・11・14～21・24・26・27・32は、底部から胴部への立上りが急で、胴部に膨みをもつタイプである。図2の16は底径7粂、底部厚1.8粂の厚底で上げ底状をなす。胎土には石英粒、砂粒が混入する。内外面とも赤褐色を呈し、内面には器面調整の条痕が認められる。底部の内外から図の点線にみえるような貼付が認められる。

図2の11は内面が黒色をなす土器で、同16にみるとおり、底部内外面から貼付して成形されたとみられるが、底部外面が剥離している。

底径は図2の11(7粂)、13(5.1粂)、14(6.2粂)、15(15.4粂)、16(6.5粂)、17(5.2粂)、18(6.1粂)、19(5.2粂)、20(5粂)、21(7.4粂)、24(5.2粂)、26(6.2粂)、27(5粂)、32(4.5粂)で、4.5～7粂以内に集中する。

これらの土器は胎土焼成が良く硬い土器であるが、同24・26、31は淡黄色を呈する他はすべて、赤褐色の土器である。

図2の12・13・29・30の4点は、くびれ部分が円味をもつタイプで1.8～1.6粂と厚底のタイプである。胎土は前者と同様であるが、表面調整がよく、焼成良好で、硬質である。底径は12(6粂)、13(5.2粂)、29(4.2粂)、30(4.3粂)で前者のタイプよりは、多少小形である。13と30はわずかに上昇底状となる。

図2の22は上げ底で、胎土には石英と赤褐色の粒が多く、混入し、暗黒色または灰色を呈する。底径5.3粂、底厚1.1粂

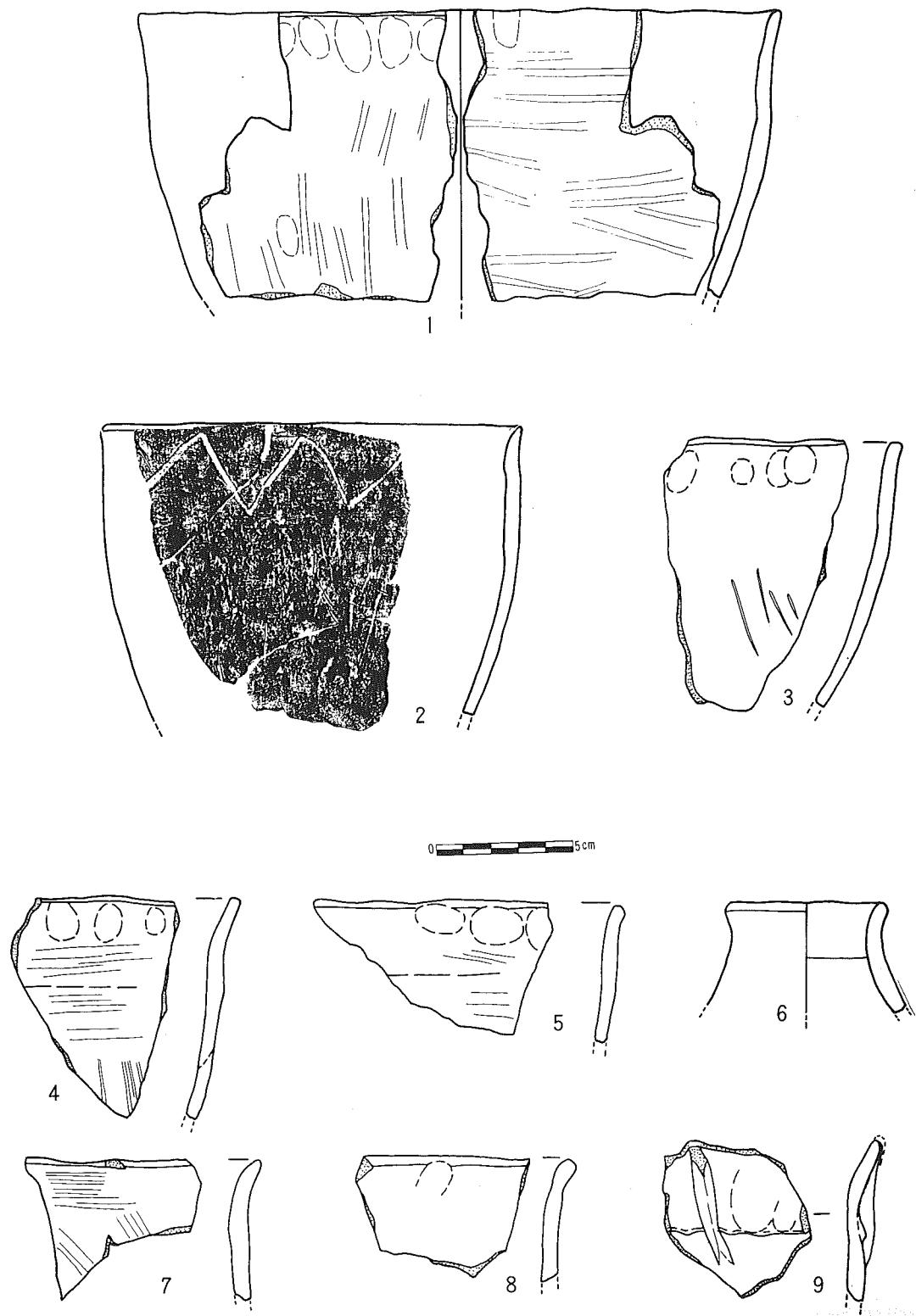
図2の33は円底状をなすくびれ平底土器である。底径2.7粂、胎土は他の赤褐色の土器と類似するが器色は外面は明るい赤褐色を呈する。

図2の24は前者のタイプに属するとみられるが小片のため不明。

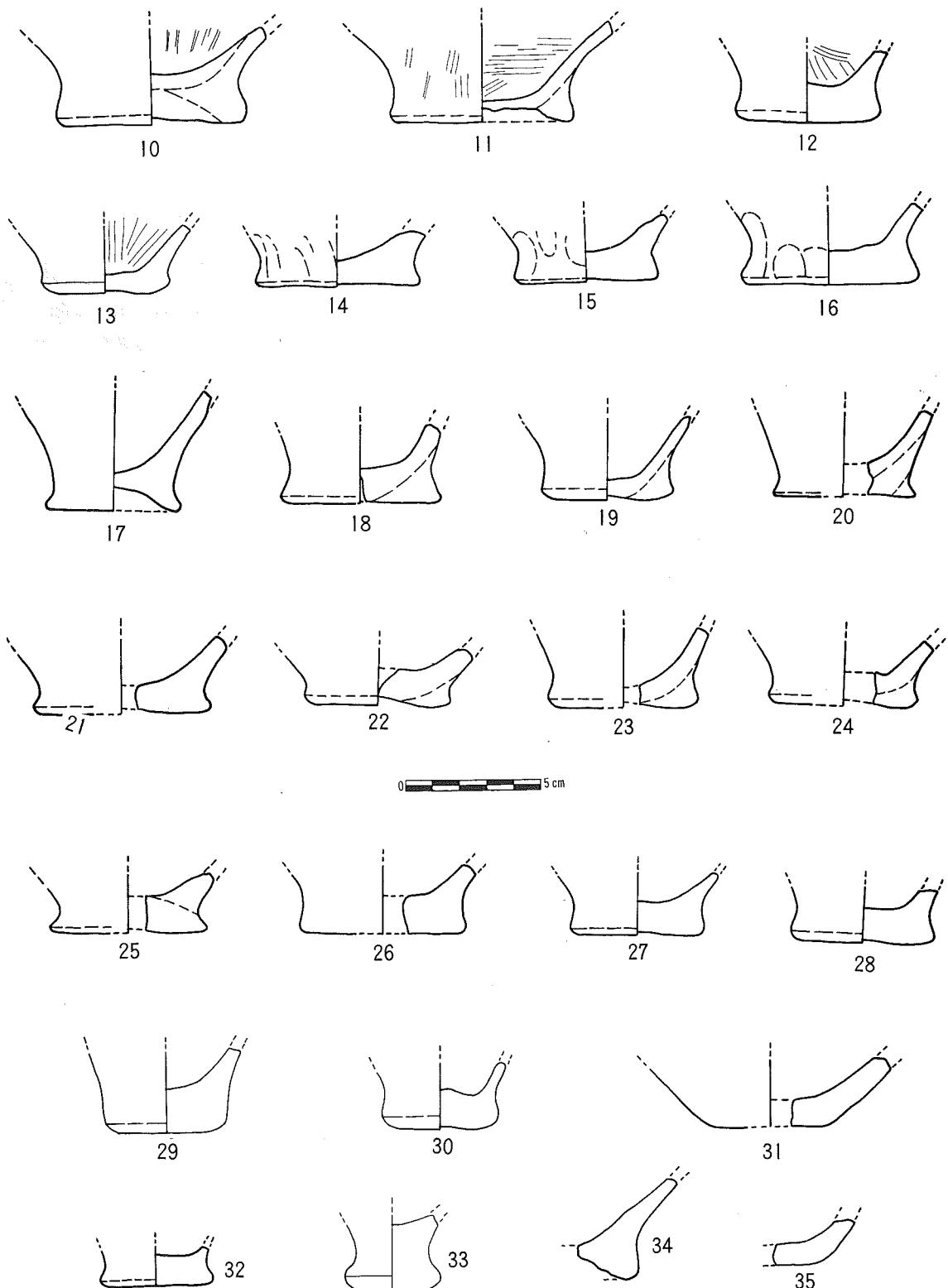
石 器

石斧 図3の1、4、図5の11が石斧である。図3の1は、短冊形をした両刃の石斧であるが刃部は磨耗している。刃部と側面を研磨されているが自然面を多く残している。頭部が一部欠損する他は、ほぼ完形の石斧である。最大長14粂、最大幅(刃部)5.8粂、最大厚3.3粂、重量415g、石質砂岩。

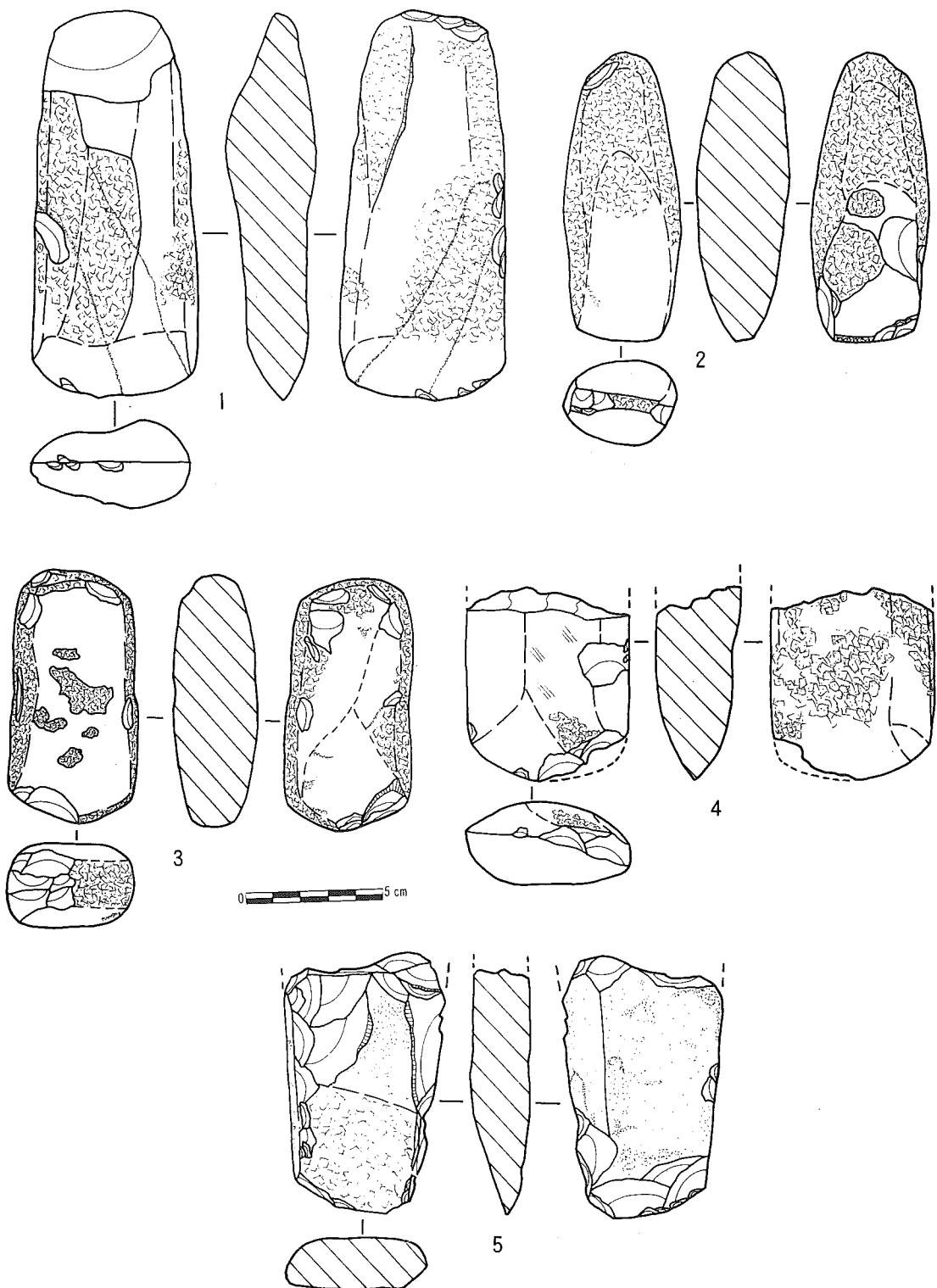
図3の4は長方形の石斧であったとみられるが、刃部から2.6粂のところまでが残存し、頭頂部が欠失する。刃部の約半分は欠失する、残存部でみると、蛤刃状をなし全面磨製の石斧である。図の波線で示したように、製作時のものとみられる陸線が認められる。最大幅5.8粂、最大厚3粂



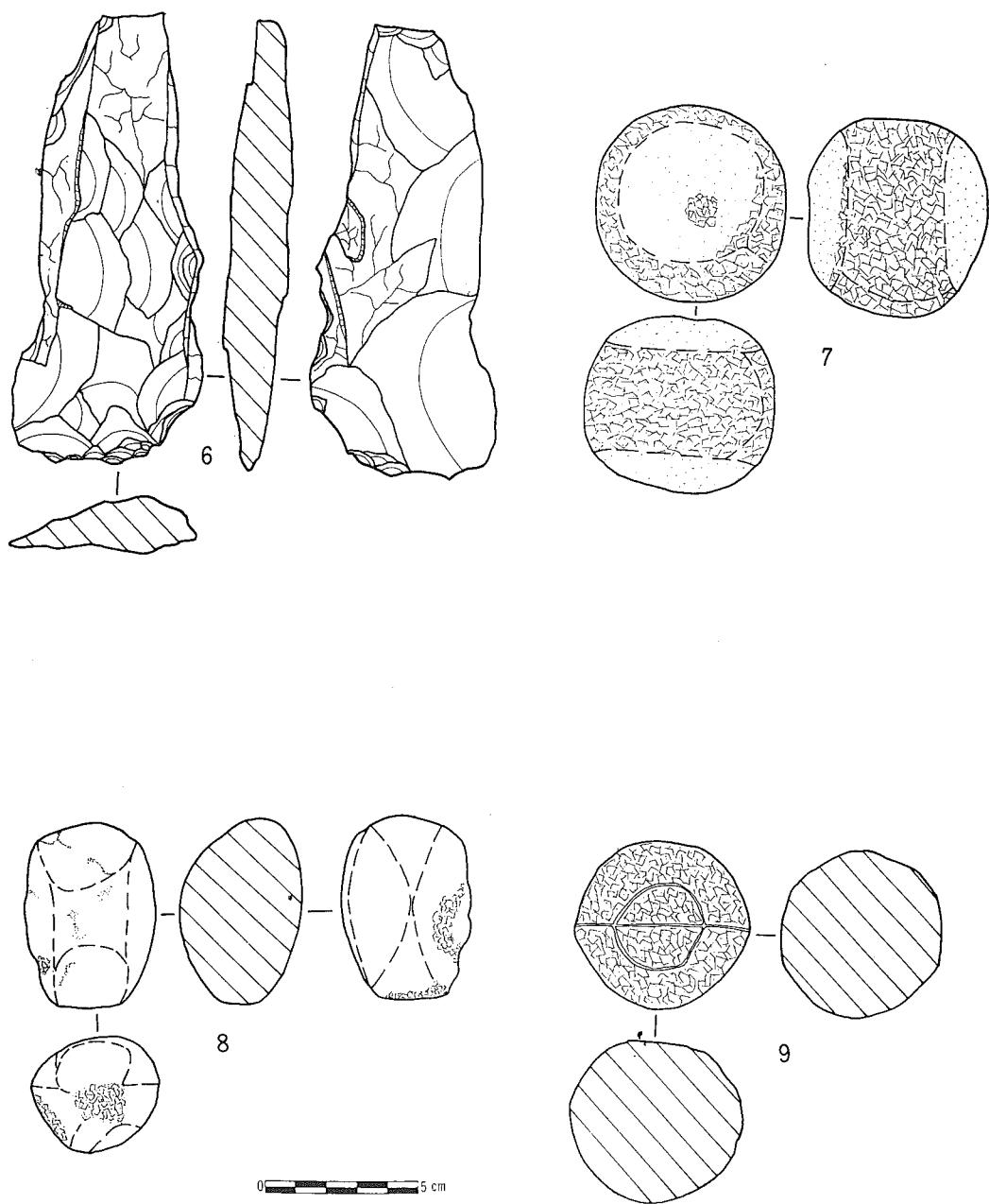
第1図 運天貝塚 土器



第2図 運天貝塚 土器底部



第3図 運天貝塚 石斧



第4図 運天貝塚 石器

重量 280g、石質砂岩。

図5の11は刃部が広がる発型のマサカリ状をした小形の両刃石斧であったとみられるが、刃部が幅2.5厘で磨り潰されている。したがって現状では石斧としては使用不可能な状態である。全面磨製である。最大長7.3厘、最大幅（刃部）5.2厘、最大厚2.3厘、重量140g、石質斑レイ岩。

図3の2は現形からみると石斧を敲石に転用したとみられる石器。長軸が反っている。最大長10厘、最大幅4.4厘、最大幅3.4厘、重量227g、石質砂岩。

図3の3は平面形が長方形の敲石で、図の下端部に敲打使用によるとみられる欠損がみられる他はほぼ完形である。側面に研磨が施され、機分抉りが入っている。最大幅4.7厘、重量260g、石質砂岩。

図3の5は側面に研磨痕がみられ、図の下端は敲打による調整が施されているが小片のため、用途は不明、重量165g、石質砂岩。

図4の6は図の下端部に敲打による調整剝離があり、石器製作途中で放置されたものとみられる。最大長14.8厘、最大幅6.2厘、最大厚2.1厘、重量180g、石質砂岩。

図4の7は球状をした磨石と凹石兼用の石器である。全面研磨が施されている。一面に敲打による凹がみられる。直径約6.5厘の球状をなしている。重量368g、石質斑レイ岩。

図4の8は隋円形をした磨石で、図に波線で示したように幾つかの面をもち完全な卵形ではない。最大長6.2厘、最大幅4.2厘、最大厚3.8厘、重量165g、石質砂岩。

図4の9は球状の磨り石で、全面研磨が施されている。図に示したように球状を分断するように乳白色をした筋が入っている。直径5.2厘、重量238g、石質砂岩。

図5の10は筒形をした敲石（ハンマー）とみられる。図の上下端に敲打痕が認められ、使用時のものとみられる欠損がある。やや方形で柱状に加工されている。上下端をのぞくとすべて研磨が施されている。最大長14.5厘・最大幅8.3厘、重量1124gと重量感がある。石質石英斑岩。

貝 製 品

貝 錘 図5の12と13の2個がある。魚撈用の綱の錘である。同図5の12はメン貝で13はアコヤ貝である。いずれも、2枚貝の頂部近くに穿穴されている。12は穴の大きさ1.3×2厘、重量15g、13は穴の大きさ2.9厘×2.2厘、重量110g

塩 屋 貝 塚

発 見 1958年 池原和夫氏発見

恩納村字塩屋部落の北はずれを流れる小川の河口附近に立地する砂丘貝塚である。位置は真栄田岬の南側付根にあり、前面の海岸には真栄田岬から長浜に至る発達したリーフが前面に広がっている。^{注3} 1958年に発見されたが1960年には採砂によって貝塚の殆んどが破壊されている。

今回紹介する採集遺物は、図6に示した13点である。これらの土器のうち図6の4～7の4点は岸本義彦氏^{注4}によって、弥生式土器として紹介されたものである。

図6の1は先端のするどい二叉の工具で刺突文が口頸部に施され胴部には紐を結んだような沈線文が施されている。口径部から胴部にかけての資料である。胎土には細い石英粒が少量混入し、器

色は赤褐色を呈する。器厚5耗の薄手の土器である。

図6の2は口縁頸部とみられる資料である。図の上端部と下部に幅約3厘の浅い曲線文が施されている。この文様から約2.8厘下に三本の曲線文がみられる。これらの文様には織維状の擦痕を残す。表面はナデ調整が施されている。胎土には石英粒と多数の砂粒が混入、表は赤褐色、裏は暗黒色を呈する焼成良好な硬い土器である。

図6の3は口縁部が外反する甕形の土器で、頸部から口縁内部にかけて、鞍状の凸帯文がはりつけられている。胎土には石英粒等の混入はみられず精選されている。器厚は4耗と薄手で、全面褐色を呈し、焼成が均一である。

図6の4は口縁部が外反し、胴部に張りのある無文甕形土器。口縁部から胴部にかけて漸次厚くなり、現存部最下端で約1厘の厚さとなる。胎土には石英粒が混入する他器面には黒色の鉱物質細粒が多数見受けられる。表裏面とも赤褐色を呈し、内面には器面調整の擦痕がみられる。

図6の5は口縁部がわずかに外反し、胴部が内傾する無文の甕形土器。内面は凹凸となっているが外面は箠磨きによる調整がなされ、手ざわりがなめらかである。器厚は口縁部をのぞくと、ほぼ9耗と一定している。胎土には石英と長石が多く含まれ、光沢を有する。器色は内面赤褐色で、外面は黒色を呈する。焼成良好で硬質の土器である。

図6の6は口縁が反り返る器形であるが、小片のため全体形は不明・口唇部に凹線が一条めぐらされている。胎土及混入物は4に同じ。内外面とも丁寧なナデ調整を施している。焼成はきわめて良好で、硬質の土器である。器厚9耗。

図6の7は6とは対照的に、内傾する鉢形の無文土器である。内外面とも丁寧なナデ調整が施され、胎土には石英粒、長石、黒色の鉱物質が多く混入する。器色は表面内外面とも黒色であるが胎土中央部は、白色及ピンク色となる。焼成はきわめて、良好である。器厚約1厘である。

図6の2・4・6・7は胎土の混入物・焼成、器面調成が丁寧であることなど、沖縄の現地産土器とは異質であり、移入土器とみられるものである。同図5も含めて、前述したように、弥生式土器として報告されているが、弥生式土器として取扱ってよいか確定はできない。今後なお検討をする土器である。^{注5}

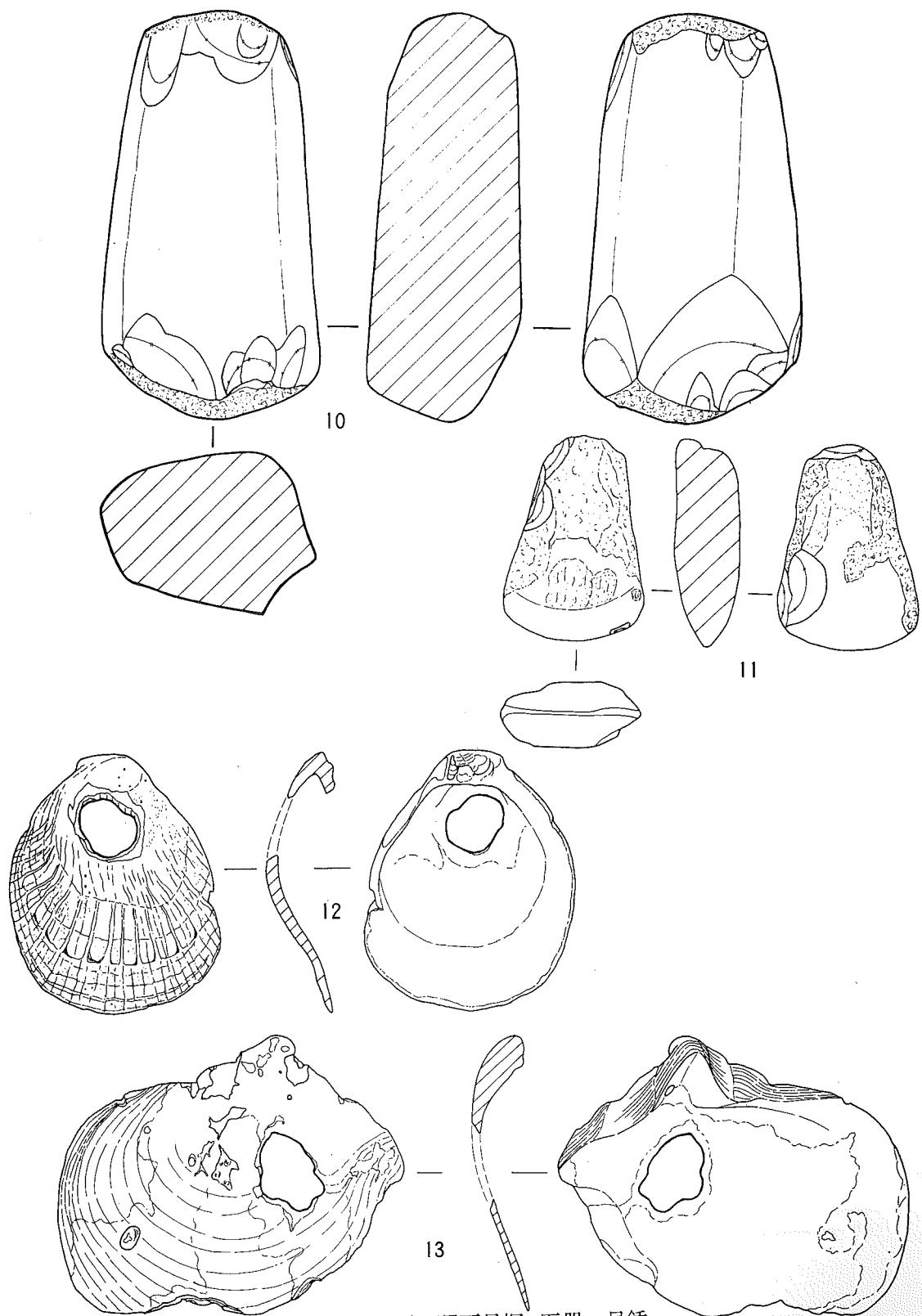
図6の8と9は尖底土器、胎土には石英粒、砂粒を含む、外面赤褐色、内面黒色の典型的な現地産の後期土器である。器厚は8が1.8厘と厚く、9は1.3厘と底部としては薄手の土器である。

図6の10はいわゆるくびれ平底の土器であるが内面の立上りが急で直角に近いため、現存部でみると筒形となる。胎土には石英が混入し、焼成が良く、硬質の土器で全面的に褐色を呈する土器である。底径3.8厘の小形土器。

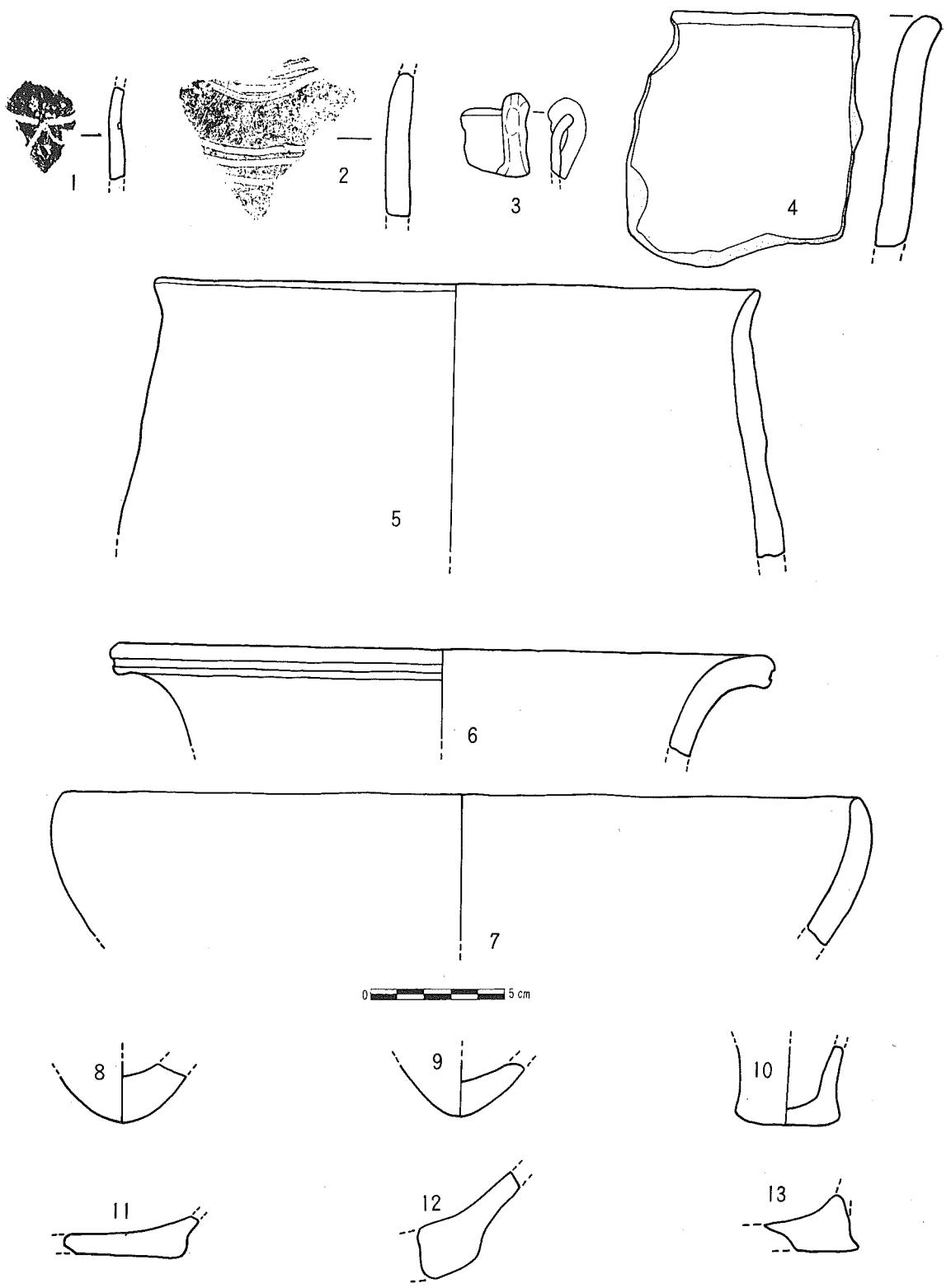
図6の11は底径の大きいくびれ平底とみられるが小片のため器形はよくつかめない。胴部への立上りが外側へ傾いており、胴に膨らみをもつ器形が想定できる。胎土には多量の石英粒混入、底厚8耗と薄手で全面赤褐色の土器である。

図6の12は、いわゆる乳母状尖底であるが小片のため特徴はよくつかめない。胎土には石英粒が混入、器色は外面褐色で内面黒色、底部の厚さ1.8厘と厚手。

図6の13はくびれ平底の土器、小片のため器形不明、胎土及器色は、12に同じ。底部厚1.2厘。



第5図 運天貝塚 石器・貝錘



第6図 塩屋貝塚 土器

具志川グスク

中頭郡具志川村字具志川の東方、金武湾に面した標高約20米の琉球石灰岩からなる独立した丘上に立地するグスクである。具志川部落との間にほぼ東西に走る県道37号線道路が走っており、この道路からグスクへは、土手状の道で1箇所通じている他はすべて断崖となっている。

この台地の西側に一部野面積みの石積みが残っているが大半は破壊されたとみられる。沖縄にはこのグスクの他同名のグスクが糸満市と久米島にあり、そのいずれも海岸に突出した丘上に築かれている。

1965年、高宮廣衛氏等によって、発掘調査がなされた。また、グスク北側の海に面した所の一部が崩壊し、その直下に遺物の堆積がみられる。そこから採集された遺物の一部が新田重清氏によって報告されている。それによると、グスク系土器、須恵器、青磁、古錢、布目痕を有する土器などが採集されている。

土器

図7の15は口縁部が外反する鉢形土器で、口縁部から胴部にかけて、器厚が8~9耗でほぼ一定し、口唇部が平口となっている。胎土には、少量の石英粒と砂粒が含まれている。器色は内面下端部が赤褐色でその他は淡黄色をなし外面と胎土中央部は黒色となっている。焼成良好で硬質の土器。

図7の16は口縁部がくの字状に外反し、口唇部が尖るタイプ。器厚は5耗と薄手で、胎土には白色の石灰岩粒を多く混入する。内外部とも籠削の後ナデ調整がなされている。焼成良く硬質である器色は外面黒色で内面は淡黄色となっている。

図7の17は口縁部が内湾する浅鉢形土器である。口唇部は平口をなし、器厚は5.5耗でほぼ均一である。内外面とも籠削りの後、ナデ調整が行なわれている。胎土には白色で偏平な物質を多く含む。器色は外面の一部が黒色を呈する他は淡黄色を呈する。焼成は良好で硬い。

図7の19は平底であるが小破片のため器種等は不明。底部から胴部への立上の部分は円味をもちながら外傾する。上げ底状に籠削りがなされている。内面にはナデ調整による擦痕がみられる。底部の中心部に向って、器厚が薄くなっている。最も薄いところで4耗、胎土には白色の物質と石英粒が混入する。全体的に暗黒色の土器である。

図7の20と21は、くびれ平底の土器、底部から胴部への立上りが外傾する。胴部に張のある深鉢形の土器が想定される。同21は底径6厘、底部厚5耗、両方とも胎土には石英が混入し、器色は赤褐色を呈する。

図7の22は口縁部が外反す口禿白磁の碗である。口縁部外側は口唇部から約2耗、内側は約5耗までが禿禿となっている。施釉されたところは光沢を有する。口径16.4厘、器厚最大5耗で、底部は欠損する。

図7の23は外反する青磁碗である。胎土は灰色で、内外面とも釉が施されており、くすんだ緑色に発色し、光沢を有する。貫入が多くみられる。口径17.2厘、器厚約5耗、底部欠損。

牧港貝塚

1932年 多和田真淳発見

本貝塚は浦添市字牧港桃原に所在する。字仲間から港川を経て東シナ海へ流れる牧港川河口近くの西側に隣接する東側に開口する標高3~4米の石灰岩洞穴内に形成された貝塚である。

洞穴内は現在拝所として拝まれており、前面に牧港川が流れ、断崖北面には風葬墓が点在する。

1983年の暮から県道153号路新設工事に伴なう県教育委員会による緊急発掘調査が実施されている。

土 器

図8の1は口縁部が外反する甕形の土器とみられるが、小片のため器種等不明。胎土には、石英粒と赤褐色の粒が多く含まれる。表面はナデ調整が施される。器色は内外面とも黒色、器厚、7厘。

図8の2は口縁部が直交をなし、口唇部が円くなり、口縁部から胴部にかけ内傾する鉢形の土器である。胎土には白色の物質が多量に混入する。焼成良好で硬質の土器。器色は褐色を呈する。器厚7耗。

図8の3は口縁部が直交し、口唇部が尖るタイプ、胎土には石英粒が混入する。器色は内外とも赤褐色であるが胎土中央部は黒色を呈する土器である。器厚9厘

図8の4は器形は前述の3に類似する。胎土には石英粒と砂粒が混入し、内外とも茶褐色を呈する土器である。器厚9耗。

図8の5は口縁部が直交し、わずかながら外傾する鉢形の土器で、口唇部先端が尖るタイプ。砂粉混入。外面上部が黒色。他はすべて褐色を呈する。器厚6厘、焼成良好で硬質。

図8の6は口縁部が直交し、口唇先端が尖って胴部が厚くなるタイプである。胎土には石英粒と砂粒が混入する。器色は全体的に褐色となる。外面の調整がスムーズで手ざわりがなめらか。現存部下端部で1.2厘と厚手の土器。

図8の7は口縁部が直交する甕形土器。口縁部先端が尖るタイプ、外面はナデ調整がなされ、内面には擦痕がみられる。胎土には石英粒混入、器色外面は茶褐色で内面黒色となる。焼成良好な硬質の土器。

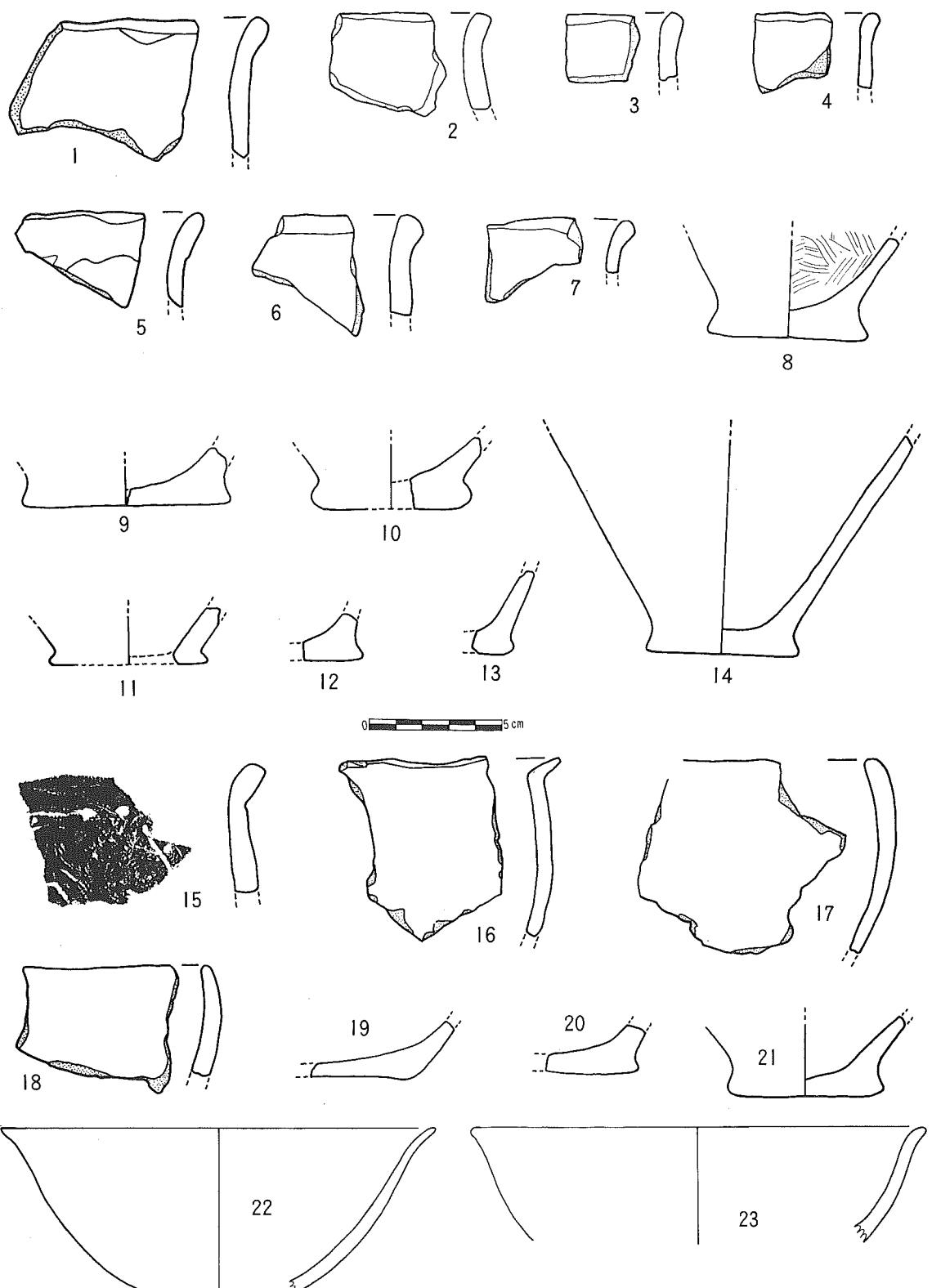
図8の8は口縁部が外反し、口唇部が円くなる甕形の土器。胎土には砂粒と赤褐色の粒が混入。器色は外面褐色で内面は淡黄色である。胎土中央部は黒色となる。焼成良好の硬質土器。

図8の9は口縁部が直交し、口縁先端が尖るタイプ、胴部が厚手の鉢形土器。胎土には石英粒、砂粒、赤褐色の粒等が混入する。器色は内外面とも褐色であるが一部煤状のものが付着し、黒色で胎土中央部が黒色、焼成良好な土器。胴部下端部で器厚1.1厘。

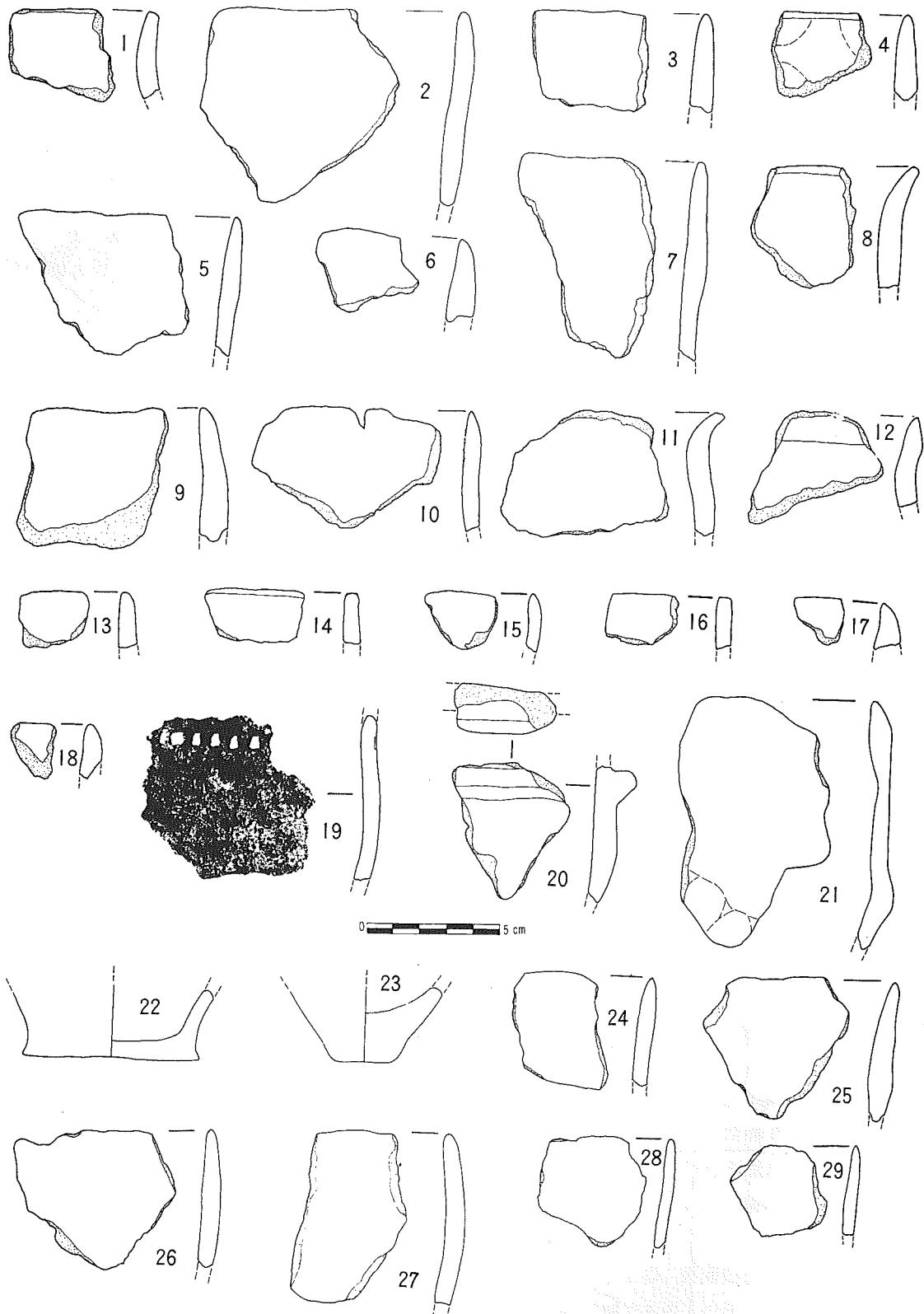
図8の10は口縁部が直交し、口唇部先端が尖るタイプ、胎土には石英が少量混入する精選された土器、全面赤褐色に焼上っており、焼成良好な硬質の土器である。器厚胴部下端部で7耗である。

図8の11は口縁部が外側へ折りまがる甕形の土器、胎土には石英粒、砂粒が混入、器色は内外面とも褐色で胎土中央部が黒色となる。内外面ともナデ調整が行なわれている。胴部下端部での器厚は9耗。

図8の12は口縁部が直交し、口唇部先端が尖った鉢形とみられる土器、外面口径部に陵線がみられる。胎土には石英粒と砂粒が多量に混入すたため粗い感じの土器である。内外面とも茶褐色を呈



第7図 (1~14)具志頭城跡土器(15~23)具志川城跡土器・白磁・青磁



第8図 牧港貝塚 土器

する。器厚は胴部下端で7耗。

図8の13は器形的には3に類似するとみられるが小片のため不明、胎土には多量の石英粒と砂粒を含み胎土は12に類似する。色は内外面とも茶褐色をなす。器色は内外面とも茶褐色をなす。器厚胴部下端で7耗。

図8の14は口縁部が直交をなす平口縁の土器、小片のため器形不明。胎土には石英粒等の混入はみられず多孔質で精選された軽い土器、器色は内外面とも赤褐色で部分的に灰色となり胎土中央部は黒色である。胴部下端部の器厚7耗。脆弱な感じの土器。

図8の15は口縁部が内湾し、口唇先端部が尖るタイプの小型鉢形土器。胎土には石英粒、砂粒が混入、器色は黄褐色で胎土中央部は黒色である。胴下端部の器厚4耗。軟質な土器。

図8の16は口縁が直交する、平口の土器、小片のため器種不明、石英及砂粒が混入、表裏面とも褐色であるが胎土中央部は黒色。表裏面ともナデ調整がなされている。胴の下端部で器厚7粩、焼成良好で硬質。

図8の17は、器形、胎土等の特徴が図1の2に類似する。

図8の18は口縁部が直交し、口唇部先端が尖り、円味をもつタイプ、小片のため器種等不明、胎土には石英粒と白色の粒が多数含まれる。器厚8耗。

図8の19は頸部から胴部にかけての破片、頸部に横捺刻文が一条施されている。内外面とも褐色、胎土には石英粒混入・器厚七耗。

図8の20は胴部外面に幅6耗の凸帯がはりめぐらされる胴部の破片。胎土には砂粒混入。器色外面褐色で内面は黒色を呈する。器の外面はナデ調整、内面は条痕を残す。胴部の下端部は内湾する器厚胴部で約1粩である。

図8の21は口縁部近くの資料、現存部外面下部には、つぎ目とみられる陵線がみられこのつぎ目の部分からくの字状に曲っている。器の内外面には成作時のものとみられる指頭庄痕が残っている胎土にはチャート粒と赤褐色の粒が混入する。外面褐色内面淡黄色となる。器厚胴下端で5耗、焼成良好な硬質の土器。

図8の22はくびれ平底土器、胴部への立上りが外傾し、胴部に膨みをもつ甕形の土器と推察される。胎土には石英粒と砂粒を含む。器色は外面褐色で内面は黄褐色、底部の厚さ8耗、胴部厚5耗、内底部には櫛状の擦痕を有する。焼成良く硬質の土器、底径6.7粩。

図8の23は乳母状尖底が押しつぶされて、平底状となった土器底部、胴部への立上りが急である。胎土には石英粒と砂粒が混入、器色内外面とも茶褐色を呈する。底径2.2粩、底部厚1.9粩と厚底の土器である。

図8の24は口縁部が直交し、口唇部先端が尖るタイプの土器。胎土には石英粒と砂粒が多量に混入する。器色外面黑色で内面褐色。焼成弱く、脆弱な土器である。厚さ7耗。

図8の25は胎土、器形等の特徴が21に類似するもので、21と同一個体であると考えられる土器である。器の内外面に指頭庄が残る。

図8の26は口縁部が直交し、口唇部が尖るタイプである。胴部は内湾する鉢形の土器、胎土には石英粒、石灰岩粒、赤褐色粒が多く含まれる。器色は外面褐色で内面淡黄色、内外面にナデ調整がなされている。胴部下端部は6耗、焼成良好で硬質の土器。

図8の27は口縁部が内湾し、口唇部先端が尖る鉢形の土器である。胎土には石英粒、砂粒が混入する。器色は外面黒色で内面淡黄色、器厚胴部下端部で8mm、焼成良好。

図8の28は口縁部が直交する鉢形土器、胎土には石英粒が混入、器色外面黒色で内面褐色、器厚4mmの薄手土器である。

図8の29は口縁部が直交し、口唇部が尖るタイプ、小片のための器種不明。胎土には石英粒、砂が混入、器色内外面とも赤褐色で胎土中央部は黒色。器厚胴部下端で5mm。

具志頭グスク

具志頭村字具志頭の東方須武座原にある。字仲座から字具志頭の南側を東北—西南に伸びる標高80~100mの琉球石灰岩丘陵の東北端に立地する。字具志頭側以外の他の3面は断崖をなし、天然の要塞となっている。

グスクの西方最上部には「タカヤツクワ」と呼ばれる物見台があり、それから北側には高さ1m前後の野面積みの石積みが残っている。この石積の北側には高さ1m前後の野面積みの石積みが残っている。この石積の北側には城門が開かれている。

ここに紹介する遺物は1954年、グスク内御嶽周辺から採集されたものである。また本遺跡から採集された。平口縁でくびれ平底の黄褐色をした甕形土器を多和田^{注6}は具志頭城式土器と命名した。

土器

図7の1~3は口縁部が外反し、口唇部が平口をなす器形で胎土は緻密で、器色は黄褐をなし部分的に赤褐色を呈する。

図7の4~7は口縁部が外反し、口唇部が円味をもつタイプ、胎土は緻密で精選された感じがある。胎土には石英等の混入はみられない。器色は赤褐色で前者に比して、焼成が良く硬質である。

底部は図7の8~14のように典型的なくびれ平底のタイプと、いわゆる乳母状尖底を上から押つぶしたようなくびれ平底のタイプ(図7の9~13)に分けられる。前者は口縁部への移行する部分がゆるやかで、胴部の張が少くないタイプ、後者は外側へ急なカーブをとり胴部へ移行する胴部に膨みを有するタイプである、口縁部でみると図7の1~3と8~14が同タイプ、図7の4~7と9~13が同タイプであるとみられる。前者には器面調整による擦痕がみられる。この前者のタイプの土器が多和田のいう具志頭式である。底径は図7の8(6.1mm)9(8mm)10(5.8mm)11(6.2mm)14(5.8mm)である。

さいごに、遺物実測をしていただいた沖縄国際大学4年次上地千賀子さんに感謝致します。

注1、『今帰仁村史』今帰仁村役場 昭和50年

2、「渡喜仁浜原貝塚調査報告書(1)」今帰仁村教育委員会 1977年3月

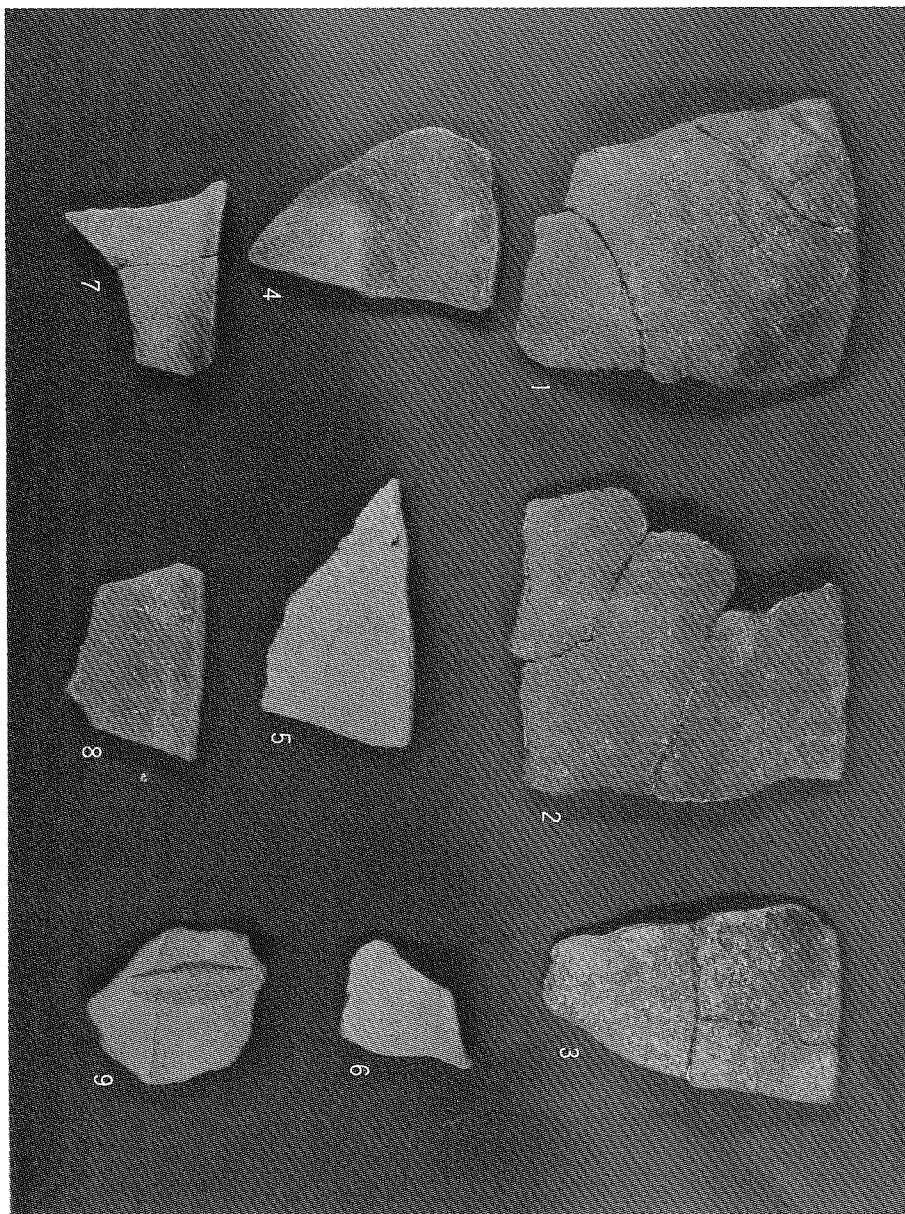
3、多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺(3)」『琉球政府文化財要覧』1960年

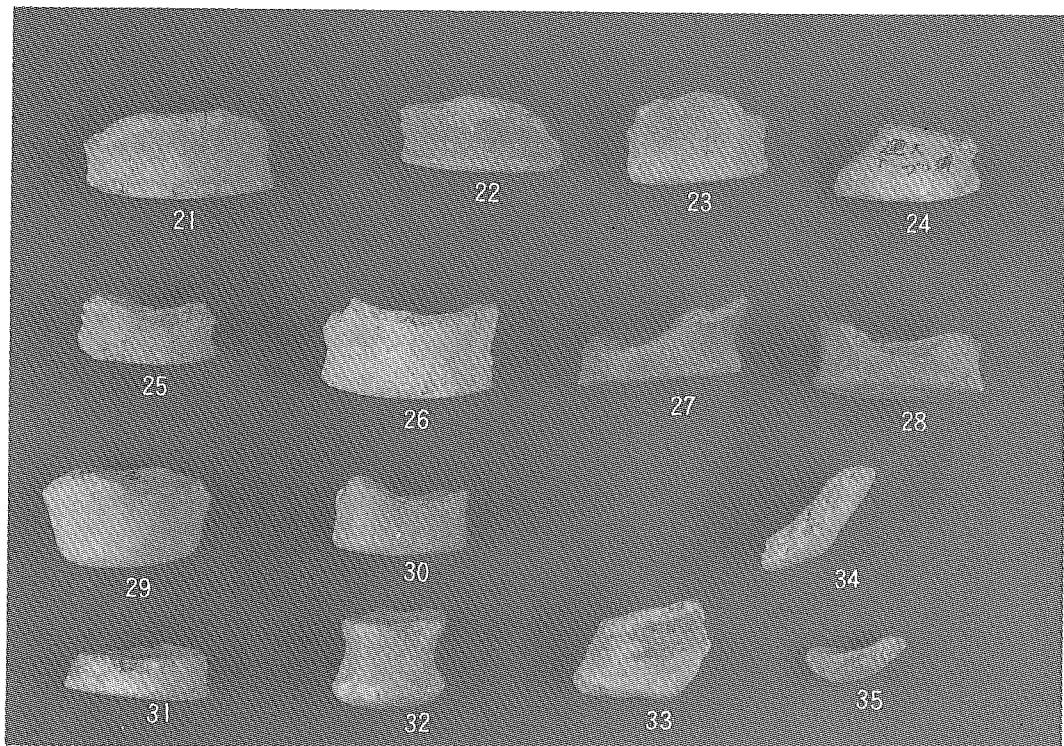
4、岸本義彦「沖縄出土の弥生土器管見」『南島考古』沖縄考古学会 1983年

5、上同

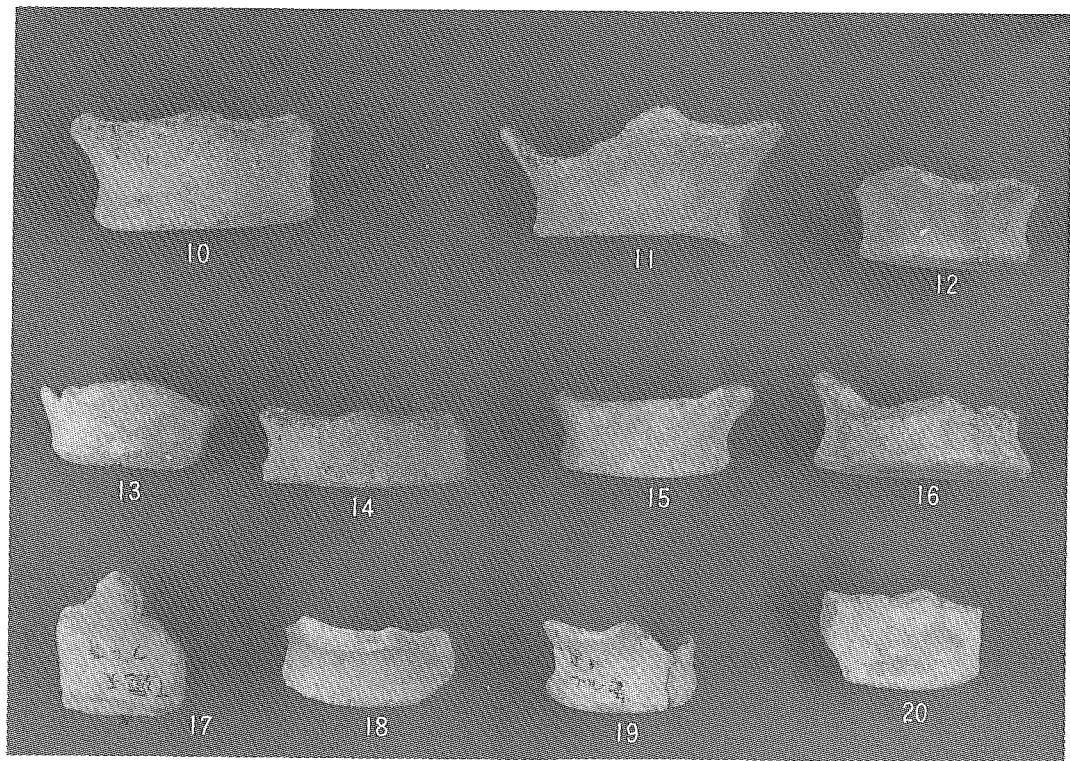
6、注1に同じ

第1図版 運天貝塚 土器

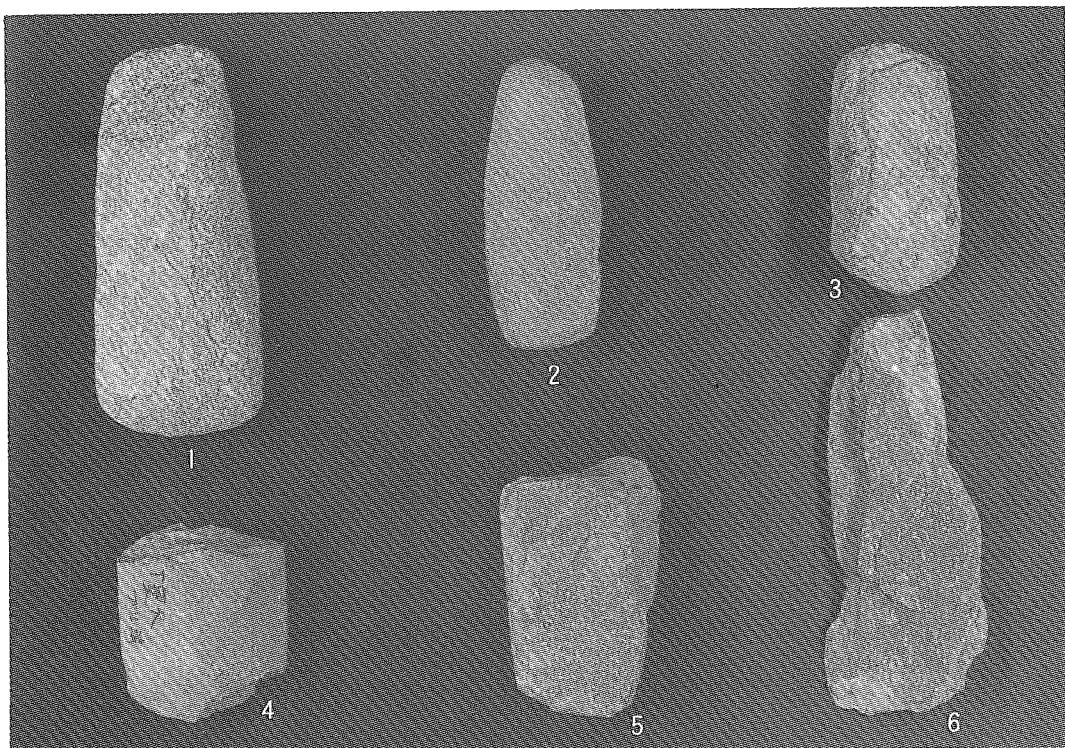




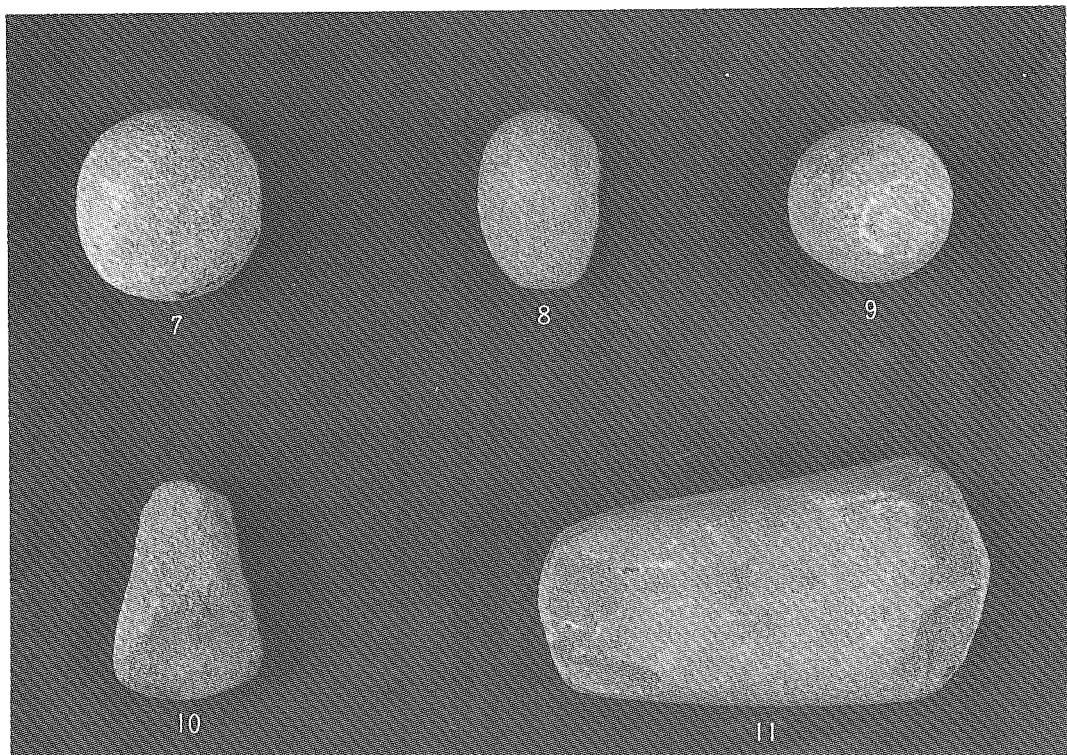
第2図版 運天貝塚 土器底部



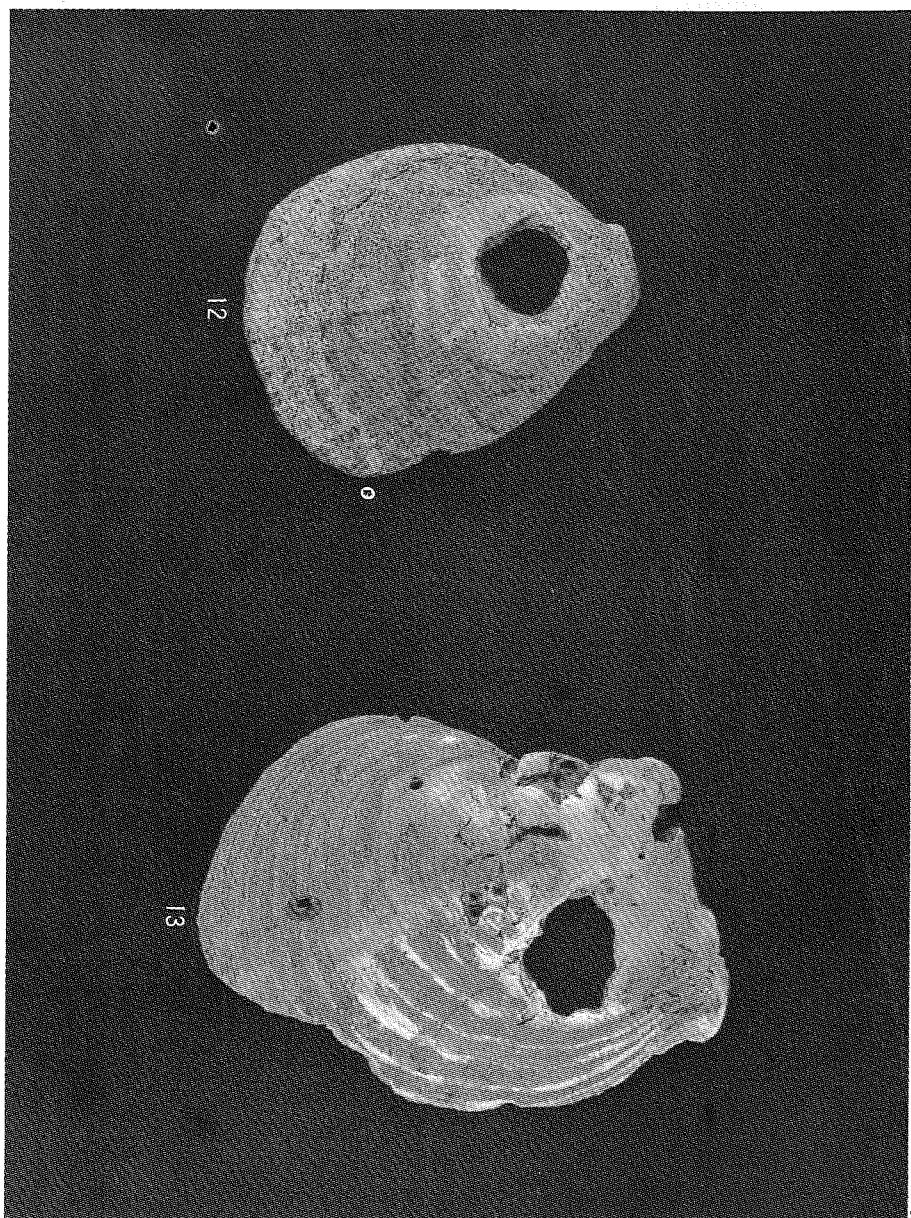
第2図版 運天貝塚 土器底部



第3図版 運天貝塚 石器



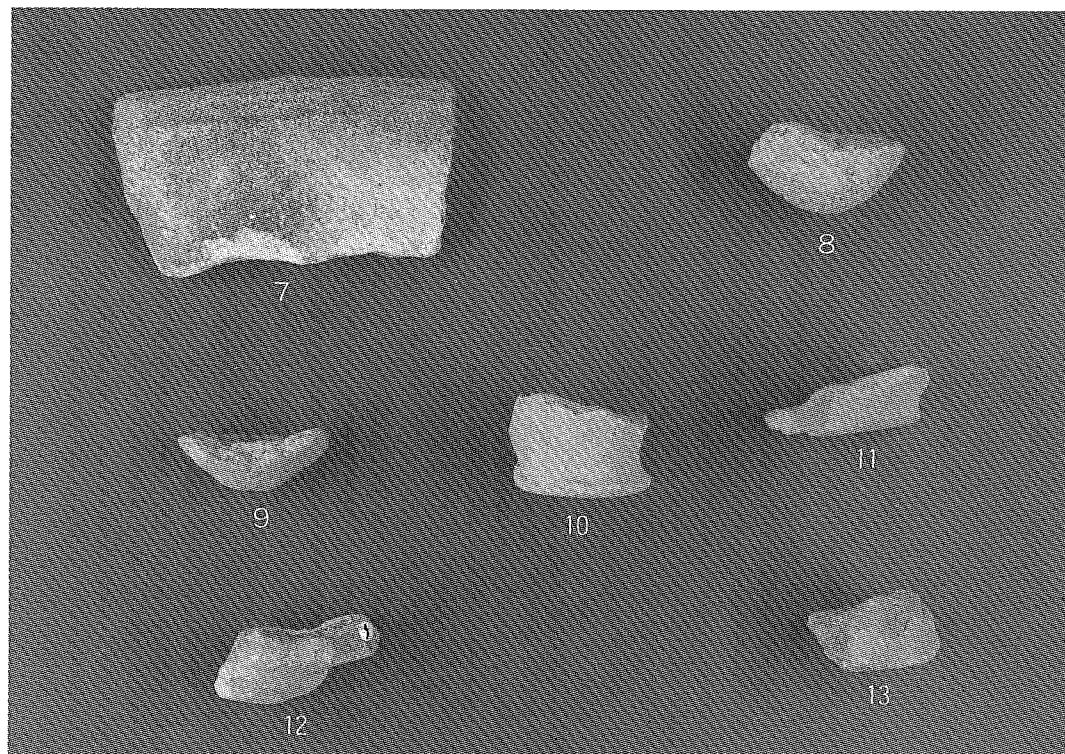
第3図版 運天貝塚 石器



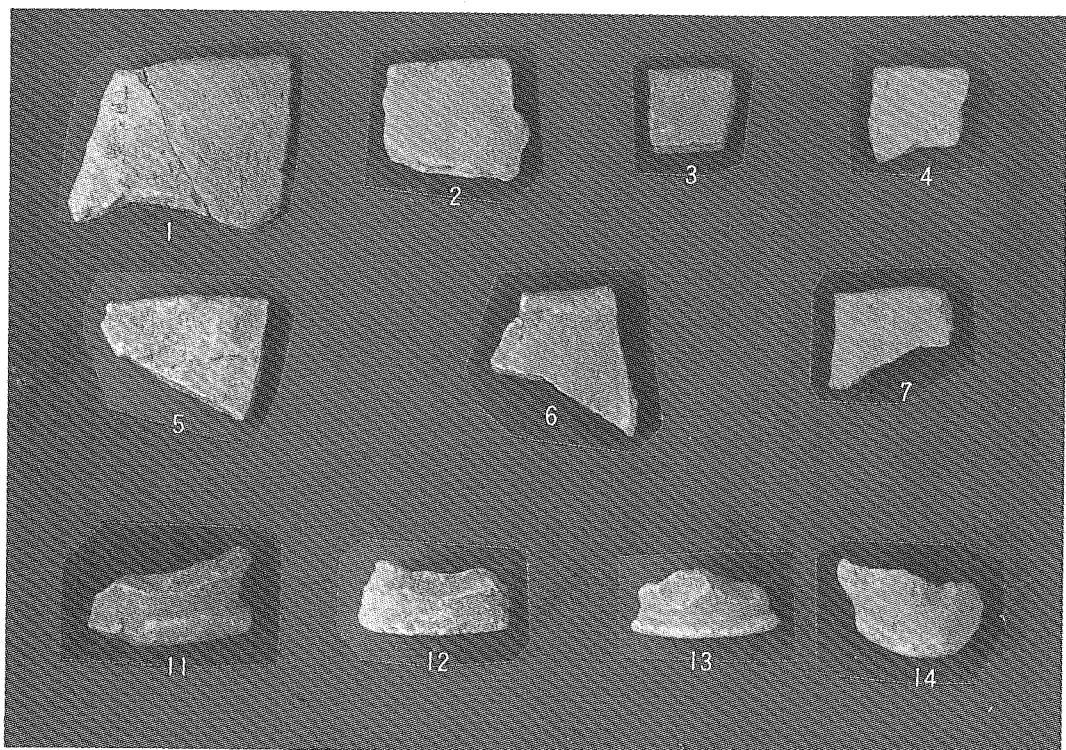
第4図版 運天貝塚 貝錘



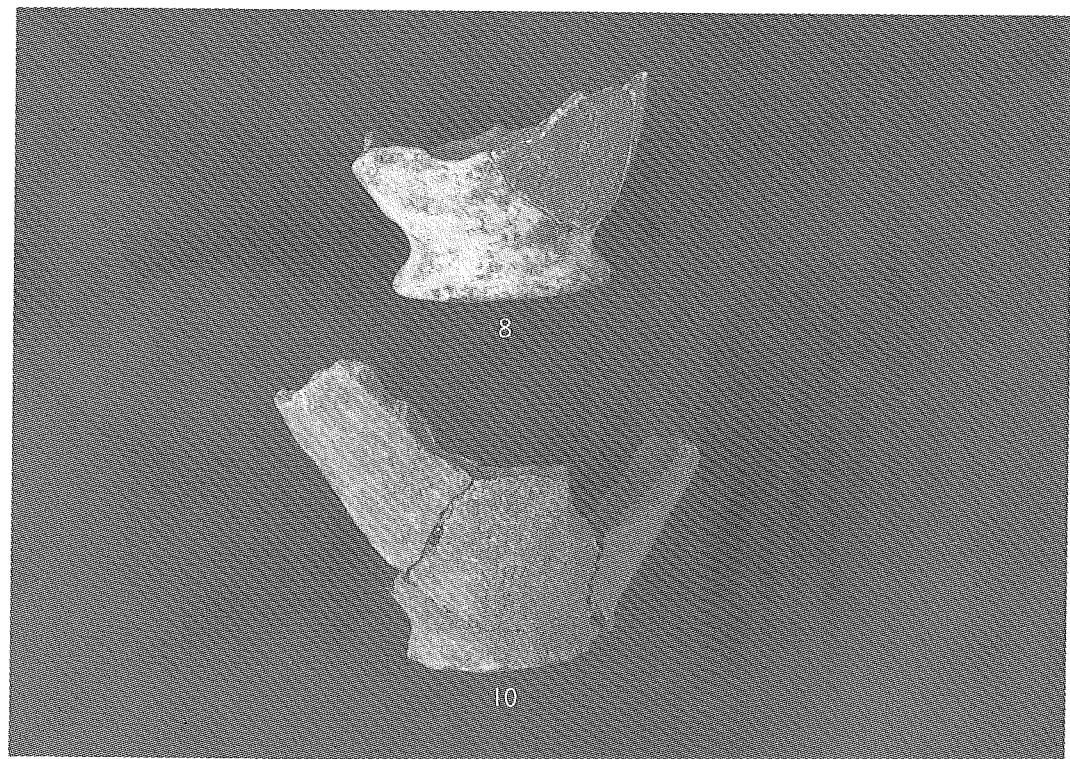
第5図版 塩屋貝塚 土器



第5図版 塩屋貝塚 土器



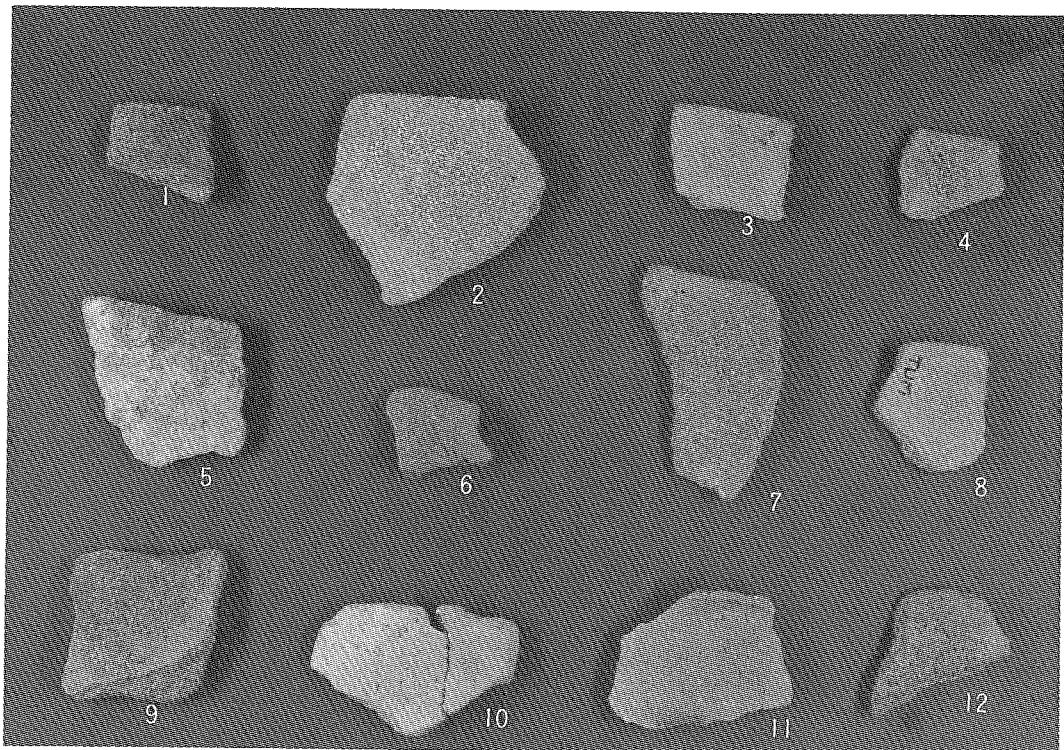
第6図版 具志頭城跡 土器



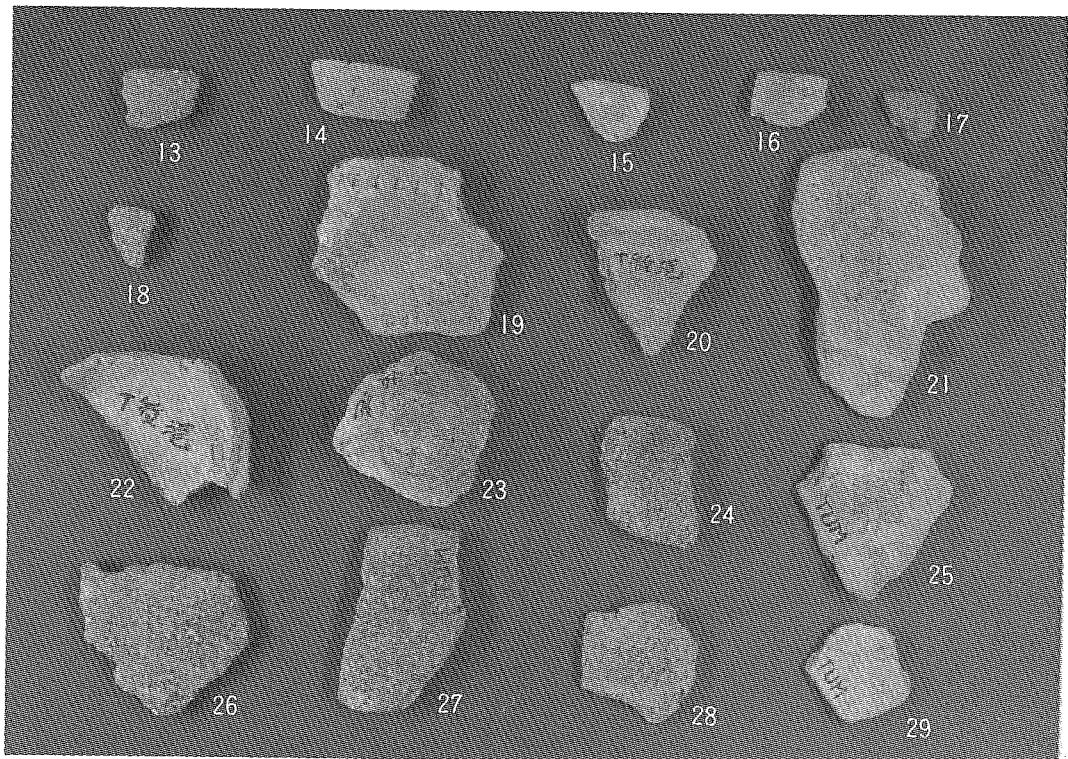
第6図版 具志頭城跡 土器



第7図版 具志川城跡 土器、白磁、青磁



第8図版 牧港貝塚 土器



第8図版 牧港貝塚 土器

沖縄群島の両生爬虫類相（Ⅲ）

—渡嘉敷島・久米島—

当山昌直*

Preliminary Reports on the Herpetological Fauna of the Okinawa Islands,

Ryukyu Archipelago (Ⅲ)

Masanao TOYAMA

During March, 1971 and September, 1982, the author surveyed the herpetological fauna of Tokashiki-jima and Kume-jima of the Okinawa Islands, Ryukyu Archipelago. Seven species of amphibians and eighteen species of reptiles were found to occur on the islands. *Rana catesbeiana* has been introduced to these Islands. Distribution of *Rhacophorus viridis viridis* once recorded from Kume-jima Is., could not be confirmed by the author. *Gehyra mutilata* and *Eumeces barbouri* was newly recorded from these Islands. Some findings on the habitat of *Opisthotropis kikuzatoi* are noted meninoned.

沖縄島の西方海上には多くの小さい島が散在する。渡嘉敷島と久米島は、これらのうちで比較的大きい島である(Fig. 1)。両島の陸棲の両生爬虫類についてはこれまでいくつかの報告がある。ヘビ類については、高良(1962)が報告し、カエルやトカゲ類については、Johnson(1972)が久米島の両生爬虫類の調査結果の中で報告し、池原(1974a)が慶良間群島の目録を作成し、また池原(1974b)は久米島の脊椎動物調査の結果の中で報告している。しかしながら、両島の両生爬虫類相を解明するのに必要な調査は、充分になされたとはいがたい。

そこで、筆者は渡嘉敷島について1971年3月4～9日・1973年5月4～6日・1981年7月14～16日、久米島について1972年2月11～13日・1972年3月5～8日・1982年9月16～20日までの延べ6回に渡って、両生爬虫類の調査を行なった。この調査期間中に得られた資料に、沖縄県立博物館に保管されている標本資料を加え、更に、従来の研究報告をも検討することによって、渡嘉敷島と久米島の陸棲の両生爬虫類についてまとめてみた。

調査方法

現地調査は、昼・夜に渡って行なわれた。生息の確認は、原則として発見された個体を採集して標本として残し種名を確定することにより行なったが、採集できなかったものについては目撃のみによって記録した。筆者自身で確認できなかった種については、これまでの研究報告を検討し、採集された標本に基づいて記録され、琉球大学農学部風樹館標本室にその標本が残っているなど記録した根拠が明確なもののみを引用した。

(★とうやま まさなお 県立博物館学芸員)

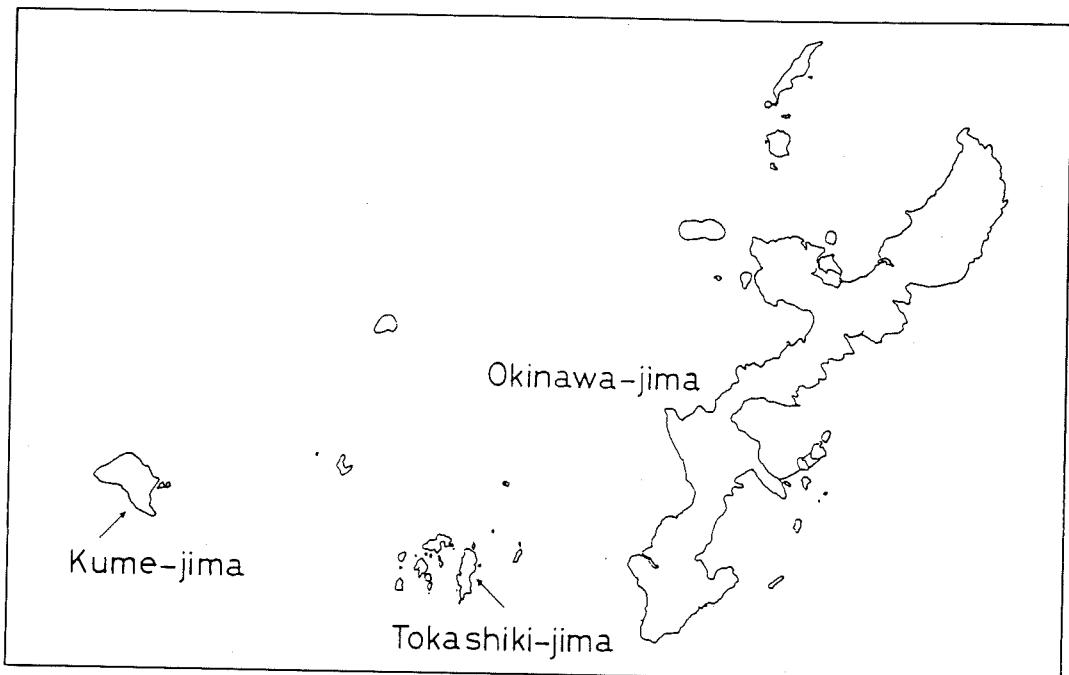


Fig. 1 Map of the Okinawa Islands, Ryukyu Archipelago.

調査結果

以下にこれまでの調査で採集及び目撃により確認された種類をあげる。採集された種類は、採集地：採集日付：採集者名（敬称略）：沖縄県立博物館標本番号（OPM H）が記されている。また、筆者自身で確認できなかったものは、高良（1962）、高良編（1972）から引用した。引用したものは、＊の記号が付されている。

両生類 AMPHIBIA

サンショウウオ目 CAUDATA

イモリ科 Salamandridae

イボイモリ *Echinotriton andersoni* (BOULENGER, 1892)

渡嘉敷島、大谷林道：1983年5月28日；佐藤文保（以下佐藤と略す）；H 676.

轢死体が大谷林道の路上で拾われた。押し潰され変形しているが、トゲ状になった背面と黒色を呈する腹面とで本種と判断できた。

シリケンイモリ *Cynops ensicauda* (HALLOWELL, 1860)

渡嘉敷島：1973年5月5日；池原貞雄（以下池原と略す）；H 68.

：1980年10月24日；宮城邦治（以下宮城と略す）；H 597, 814-816.

カエル目 SALIENIA

アカガエル科 Ranidae

ヌマガエル *Rana limnocharis limnocharis* WIEGMANN, 1835

渡嘉敷島：1980年10月24日；宮城；H 817-819. : 1983年3月29日；佐藤；H 699-731.

渡嘉敷島、渡嘉敷：1981年7月15日；当山昌直（以下当山と略す）；H 432, 732, 733,

久米島, 具志川: 1977年4月1日; 田中聰(以下田中と略す); H 579,

久米島: 1973年2月25日; 採集者不明; H 206.

渡嘉敷島では、渡嘉敷部落の水田地帯に多くみられた。1982年の久米島調査では採集することができなかった。城間伴氏(私信)によると、1973年2月21日から25日までの間に採集された標本は、ちょうどそのころ行なわれた久米島の動物調査の際、池原貞雄・安部琢哉・城間伴の各氏によって採集されたものと推定される。

ウシガエル *Rana catesbeiana* SHAW, 1802

渡嘉敷島: 1971年5月; 伊沢恵美子(以下伊沢と略す); H 317

渡嘉敷島, 渡嘉敷: 1981年7月15日; 当山; H 434. : 1983年3月29日; 佐藤; H 667.

久米島: 1973年2月25日; 採集者不明; H 204, 205.

久米島, 白瀬川: 1982年9月19日; 当山; H 450, 781. : 1982年9月18日; 佐藤; H 788-790.

渡嘉敷島では、1971年に渡嘉敷部落に近い水田地帯に多くみられたが、そこにはヌマガエルも同じ場所に生息していた。1981年に再び調査した時も同じ場所で両種を確認した。阿波連部落では本種を確認していない。久米島における1972年2月の夜間調査では、儀間近くにある水田地帯では本種だけが確認された。1982年の調査では、久米島の水田地帯のほとんどがサトウキビ畑に変わっており、同じ場所で本種を確認できなかった。白瀬川のダムの上流の渓流でも本種が採集された。

ホルストガエル *Babina holsti* (BOULENGER, 1892)

渡嘉敷島: 1980年9月18日; 城間伴(以下城間と略す); H 342.

: 1979年7月26日; 佐藤; H 664. : 1983年3月29日; 佐藤; H 674.

: 1983年3月30日; 佐藤; H 675.

渡嘉敷島で採集された標本は体長8cmに満たない亜成体であるが、1981年7月15日の調査時に大谷林道にて体長10cm以上とみられる本種を目撃した。

アオガエル科 Rhacophoridae

ニホンカジカガエル *Buergeria japonica* (HALLOWELL, 1860)

渡嘉敷島: 1980年9月25日; 宮城; H 820. : 1983年3月29日; 佐藤; H 685-698.

渡嘉敷島, 大谷林道: 1981年7月15日; 当山; H 435, 734.

久米島: 1973年2月25日; 採集者不明; H 207.

久米島, 白瀬川: 1982年9月18日; 当山; H 454, 786.

ジムグリガエル科 Microhylidae

ヒメアマガエル *Microhyla ornata* (DUMERIL et BIBRON, 1841)

渡嘉敷島, 渡嘉敷: 1981年7月15日; 当山; H 433.

久米島, 白瀬川: 1982年9月18日(目撃)

久米島では白瀬川上流にある簡易水道の貯水池で本種のオタマジャクシを確認した。

爬虫類 REPTILIA

カメ目 TESTUDINATA

カメ科 Emydidae

リュウキュウヤマガメ *Geoemyda spengleri japonica* (FAN, 1931)

久米島：1953年10月15日；喜久里教達（以下
喜久里と略す）*

久米島，白瀬川：1982年9月18日（目撃）

渡嘉敷島では、調査中に目撃することはできなかったが、地元の人に聞いたところ本種は生息しているとのことであった。久米島では白瀬川上流部の渓流の調査中に3個体を目撃したが（Fig. 2）、天然記念物に指定されているので採集はしなかった。

トカゲ目 SQUAMATA

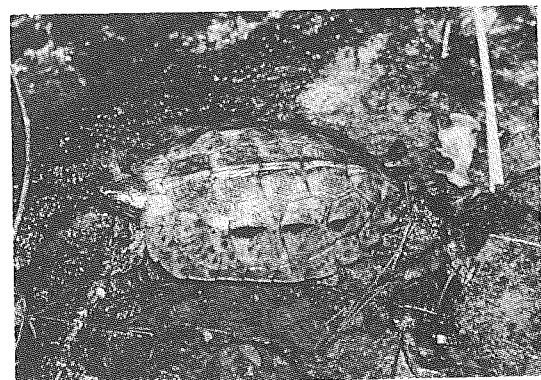


Fig. 2 *Geoemyda spengleri japonica* from Kume-jima Island.

ヤモリ科 Gekkonidae

ニホンヤモリ *Gekko japonicus* (DUMERIL et BIBRON, 1836)

渡嘉敷島：1971年3月9日；伊沢；H 44.

：1971年3月9日；上原幸得（以上上原と略す）；H 135.

渡嘉敷島，渡嘉敷：1973年5月4日；安部琢哉（以下安部と略す）；H 95.

：1973年5月4日；当山；H 45.

：1973年5月5日；当山；H 46, 140.

：1973年5月6日；当山；H 15, 48.

久米島，大田：1972年3月6日；当山；H 40, 41, 149.

久米島，白瀬川：1973年2月22日；採集者不明；H 47.

渡嘉敷島産の標本は、部落内の生垣など樹木の多い所で多く採集された。久米島大田では、部落から離れた所にある公民館で採集されたが、同じ場所でホオグロヤモリも採集されている。

ホオグロヤモリ *Hemidactylus frenatus* DUMÉRIL et BIBRON, 1836

渡嘉敷島，渡嘉敷：1973年5月6日；当山；H 22, 35, 113.

渡嘉敷島，阿波連：1981年7月15日；当山；H 436.

渡嘉敷島：1980年10月24日；宮城；H 821, 822.

久米島，大田：1972年3月6日；当山；H 139.

久米島：1973年2月25日；採集者不明；H 33.

調査時の標本は、すべて家屋またはその近くで採集されている。

オンナダケヤモリ *Gehyra mutilata* (WIEGMANN, 1835)

渡嘉敷島：1980年10月24日；宮城；H 812.

マダラトカゲモドキ *Eublepharis kuroiwae orientalis* M. MAKI, 1930

渡嘉敷島，渡嘉敷：1971年5月9日；勝連盛輝；H 325.

渡嘉敷島，大谷林道：1981年7月15日（目撃）

久米島，大原：1965年4月14日；喜久里；H 9.

久米島，兼城：1966年4月14日；喜久里；H 8.

久米島, ガニマンロウアブ: 1972年11月28日; 下謝名松栄; H 3.

久米島, 白瀬川: 1982年9月18日 (目撃)

渡嘉敷島における夜間調査 (1981年7月15日) では、渡嘉敷部落の石垣が積まれた所でも見られた。特に、大谷林道ではたくさんの個体がみられた (Fig. 3)。久米島における1982年の調査では、夜間に白瀬川上流の渓流で発見され (Fig. 4)、また昼間に宇江城岳東側中腹にある宇江城観音堂付近で板の下に潜んでいるのがみられた。本種は天然記念物に指定されているので採集はしなかつた。久米島産のH 8は兼城部落の石垣から、H 9は採石場で、いずれも天然記念物指定以前に採集されている。



Fig. 3 *Eublepharis kuroiwae orientalis*
from Tokashiki-jima Island.



Fig. 4 *Eublepharis kuroiwae orientalis*
from Kume-jima Island.

キノボリトカゲ科 Agamidae

キノボリトカゲ *Japarula polygonata polygonata* (HALLOWELL, 1860)

渡嘉敷島: 1973年5月6日; 当山; H 187, 188. : 1983年3月29日; 佐藤; H 671, 672.

渡嘉敷島, 大谷林道: 1981年7月15日; 当山; H 437, 736.

久米島, 白瀬川: 1973年2月22日: 採集者不明; H 82.

: 1982年9月18日; 岩附信紀; H 451.

: 1982年9月18日; 黒住耐二 (以下黒住と略す); H 779.

: 1982年9月18日; 当山; H 780, 783. : 1982年9月18日; 佐藤; H 781, 782.

トカゲ科 Scincidae

バーバートカゲ *Eumeces barbouri* VAN DENBURGH, 1912

久米島, 白瀬川: 1982年9月18日; 当山; H 452. : 1982年9月18日; 黒住; H 453.

2個体は、宇江城岳の頂上に至る自動車道の途中から分かれて、白瀬川上流に向かう道の路傍で採集された。H 452は頭胴長36.5mmの雄、H 453は55.0mmの雌で尾は切れている。後鼻板は認められないが、胴中央部の体鱗列数は、H 452が20列、H 453が22列であり、バーバートカゲの標徴を多く備えているので本種と同定した。久米島産の2個体は、体鱗列の他に次の特徴が認められた。
①白色の背側線は中央から2番と3番目の鱗の間を通る。②黒色の背面基色が腹側面まで伸び、腹面は暗青色を呈する。③尾部背面中央部における黒色の背面基色の伸長度は、体長の約33%である (H 452)。

オキナワトカゲ *Eumeces marginatus marginatus* (HALLOWELL, 1860)

渡嘉敷島：1980年10月24日；宮城；H 823.

渡嘉敷島，阿波連：1981年7月15日；当山；H 430, 735.

久米島，宇江城岳：1977年4月2日；田中；H 569, 572.

渡嘉敷島では、渡嘉敷と阿波連部落を結ぶ山道、阿波連部落から南に伸びる山道でみられた。H 569 と H 572 とは、久米島宇江城岳の頂上部にある自衛隊基地内をはしる自動車道の路傍で採集されている（田中聰氏、私信）。

ヘリグロヒメトカゲ *Ateuchosaurus pellopleurus* (HALLOWELL, 1860)

渡嘉敷島：1971年3月9日；上原；H 56. : 1971年3月9日；名城満隆；H 101.

: 1971年3月9日；永村清；H 154. : 1971年3月9日；山内重憲；H 155.

: 1973年5月4日；当山；H 57. : 1973年5月6日；当山；H 152, 153, 156.

: 1981年7月15日；当山；H 431. : 1980年10月24日；宮城；H 813.

: 1983年3月29日；佐藤；H 677-684.

久米島：1973年2月25日；採集者不明；H 58, 99, 105, 106, 143.

久米島，白瀬川：1982年9月18日；当山；H 455. : 1982年9月18日；黒住；H 784.

カナヘビ科 *Lacertidae*

アオカナヘビ *Takydromus smaragdinus* BOULENGER, 1887

渡嘉敷島：1971年3月8日；上原；H 128, 129. : 1971年3月11日；伊沢；H 90.

: 1973年5月4日；当山；H 116-119. : 1973年5月5日；城間；H 70.

: 1980年10月24日；宮城；H 824, 825. : 1983年3月29日；佐藤；H 673.

久米島，仲泊：1972年2月25日；当山；H 69.

久米島，宇江城岳，ハブヒール：1973年2月21日；採集者不明；H 171-174.

久米島，白瀬川；1973年2月22日；採集者不明；H 167-169, 175-177.

: 1982年9月18日；当山；H 456, 785.

久米島：1973年2月25日；採集者不明；H 178-180.

メクラヘビ科 *Typhlopidae*

メクラヘビ *Ramphotyphlops braminus* (DAUDIN, 1803)

渡嘉敷島：1973年5月5日；池原；H 76.

久米島：1973年2月25日；採集者不明；H 331.

ヘビ科 *Colubridae*

アカマタ *Dinodon semicarinatus* (COPE, 1860)

渡嘉敷島：1976年7月4日；田中；H 589. : 1980年10月24日；宮城；H 811.

久米島：1956年9月10日；喜久里；*

ガラスヒバア *Amphiesma pryeri pryeri* (BOULENGER, 1887)

渡嘉敷島：1976年10月14日；田中；H 617. : 1983年3月29日；佐藤；H 668, 669.

久米島，ハブヒール：1973年2月25日；採集者不明；H 362.

リュウキュウアオヘビ *Entechinus semicarinatus* (HALLOWELL, 1860)

渡嘉敷島、大谷林道：1981年7月15日；当山；H 438.

久米島、白瀬川：1982年9月18日；当山；H 60.

キクザトサワヘビ *Opisthotropis kikuzatoi* (Y. OKADA et TAKARA, 1958)

久米島、白瀬川：1965年8月20日；採集者不明；H 5. 1982年9月19日；当山；H 665.

久米島で河川を含めて最も良い状態で自然が残っているのは白瀬川上流部であった。白瀬川の上流部近くには小規模のダムが施されている。ダムより下流とダムより上流との2か所に分けて調査し、ダムの上流ではいくつかの支流を調査した。ダムより下流は、ダム建設に伴う工事のためか河床には土砂が堆積して状態が良くなかった。ダムより上流にあるいくつかの支流は、開墾による土砂の流入によって、河床は土砂で覆われていた。宇江城岳山頂（自衛隊基地がある）に至る自動車道の東側にある一支流だけは自然状態が保たれていた。そこは、ダムから上がると緩やかな傾斜の流れが数百m 続き (Fig. 5)、山頂部に向かって急傾斜の小さな流れとなっている。これらの支流を

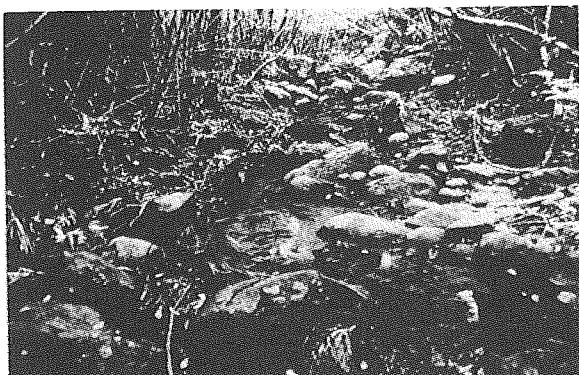


Fig. 5 Habitat of *Opisthotropis kikuzatoi* at the Shirasegawa River, Kume-jima Island.

昼夜調査したところ、1982年9月19日午前10時頃、自然状態の保たれた緩やかな傾斜の流れの中で本種が泳いでいるところを発見した。本種は、流れの中にある木の毛根の側で、流れに逆らって河床を泳ぎながら定位置を保っていた。約5m離れた所で観察していたが、人の気配で水中の毛根の中に潜りこんで隠れただけで捕獲した。H 5は、喜久里教達氏によって標本が当館に寄贈された。採集場所は、タイプ標本の採集地点と同じ白瀬川の上流 (Toyama, 1983b) で、同氏が学校に在職して

ていたころの生徒が採集したものらしい。キクザトサワヘビ (Fig. 6) は、これまで *Ophedrys* 属に含まれていたが、新たに検討した結果 *Opisthotropis* 属に属することがわかった (Toyama, 1983b)。この属の一つの特徴として溪流に生息していることがあげられる。それで、従来のキクザトアオヘビとされていた和名を本種の生態的な特徴に因んでキクザトサワヘビと改称した。また、*Opisthotropis* 属の和名が無いので、新しくサワヘビ属と呼びたい。

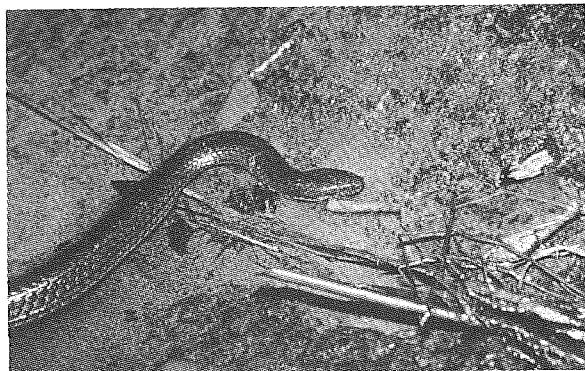


Fig. 6 *Opisthotropis kikuzatoi* from Kume/jima Island.

コブラ科 Elapidae

ハイ *Calliophis japonicus boettgeri* (FRITZE, 1894)

渡嘉敷島：1978年5月21日；田中；H 618.

久米島：1978年8月；新垣盛行；H 13.

久米島産の標本 H 13 は、当山 (1981) が報告したように、体背面の黒色横斑が完全に消失して5本の縦線のみを有する。

クサリヘビ科 Viperidae

ヒメハブ *Trimeresurus okinavensis* BOULENGER, 1892

久米島：1959年4月6日；喜久里；*

ハブ *Trimeresurus flavoviridis* (HALLOWELL, 1860)

渡嘉敷島，大谷林道：1981年7月15日（目撃）

久米島：1957年2月21日；高良鉄夫；*

渡嘉敷島の1981年7月の調査では、夜間大谷林道の路傍に現われたものを目撃した。久米島産の標本は、琉球大学農学部風樹館に保管されている17個体のうちの一つである。

調査結果の検討

これまでの調査研究の成果をもとにすると、渡嘉敷島・久米島に確実に分布していると思われる種類は、両生類6属7種、爬虫類16属18種である（Table 1）。以下、得られた結果に基づいて若干の検討を加える。

Table 1. Distribution of amphibians and reptiles on Tokashiki-jima, Kume-jima, the Okinawa Islands, Ryukyu Archipelago.

Species	Tokashiki-jima	Kume-jima
AMPHIBIA		
<i>Echinotriton andersoni</i>	+	-
<i>Cynops ensicauda</i>	+	-
<i>Rana limnocharis limnocharis</i>	+	+
<i>Rana catesbeiana</i>	+	+
<i>Babina holsti</i>	+	-
<i>Buengeria japonica</i>	+	+
<i>Microhyla ornata</i>	+	+
REPTILIA		
<i>Geoemyda spengleri japonica</i>	+	+
<i>Gekko japonicus</i>	+	+
<i>Hemidactylus frenatus</i>	+	+
<i>Gehyra mutilata</i>	+	-
<i>Eublepharis kuroiwae orientalis</i>	+	+
<i>Japarula polygonata polygonata</i>	+	+
<i>Eumeces barbouri</i>	-	+
<i>Eumeces marginatus marginatus</i>	+	+
<i>Ateuchosaurus pellopleurus</i>	+	+
<i>Takydromus smaragdinus</i>	+	+
<i>Ramphotyphlops braminus</i>	+	+
<i>Dinodon semicarinatus</i>	+	+*
<i>Amphiesma pryeri pryeri</i>	+	+
<i>Entechinus semicarinatus</i>	+	+
<i>Opisthotropis kikuzatoi</i>	-	+
<i>Calliophis japonicus boettgeri</i>	+	+
<i>Trimereurus okinavensis</i>	+	+*
<i>Trimeresurus flavoviridis</i>	+	+*

+: Found

-: Not Found

* from Takara (1962)

両生類

池原（1974a）によると、1965年3月28日にイボイモリが渡嘉敷島の国立青年の家北方の渓谷で下謝名松栄氏によって採集されている。今回もまた確認されたので、本種がこの島に分布しているのは確実とみられる。

シリケンイモリは、久米島では確認できなかった。これまでの記録を見ても、本種を確認したという報告は全く無い。地元の人に聞いても、見たことが無いという。おそらく久米島には分布していないと思われる。久米島は、最高地点 306.5m（宇江城岳）で、渡嘉敷島の最高地点 227m よりも高く、面積も渡嘉敷島より大きい。更に、水系も発達しているので久米島はイモリ類の生息できる条件は満たしていると思われるが、分布していないのが興味深い。

渡嘉敷島では、ウシガエルによるヌマガエルの極端な減少は無いように思われた。ウシガエルの生息地は渡嘉敷部落の近くにある水田地帯を中心とする地域に限定されているように見える。久米島では、山地の渓流にも生息地を広げている。ヌマガエルが容易に確認されないのは、ウシガエルの影響や水田のサトウキビ畑化などによって生息地を奪われ、本種が減少したことに起因する考えられる。

当山ほか（1983）は、ホルストガエルを渡嘉敷島より報告したが、その後1983年3月にも採集された。成熟した個体を含む渡嘉敷島産の変異の内容は未だ知られていない。

Johnson（1972）は、1965年3月の久米島滞在時にGima（儀間と推定される）の水田近くで、ナミエガエル *Rana namiyei* を採集したとしている。筆者は、1972年2月に同地点を夜間調査したがウシガエルしか確認できなかった。1982年の調査ではナミエガエルの分布の可能性を考慮し、沖縄島での同種の生息場所に似ている白瀬川の上流を注意して探したが発見できなかった。筆者の沖縄島における観察によると、ナミエガエルは山地の渓流でしか見られない。それで、Johnson（1972）が水田の近く（付近には生息に適した渓流は見当たらない）でナミエガエルを採集したというのには疑問が残る。

ウシガエルの久米島への移入は1953年である（池原、1974b）が、Johnson（1972）のリストには記されていない。ナミエガエルの体長はウシガエルのそれに近いので、Johnson（1972）のナミエガエルの記録はウシガエルの誤認とすることも可能と考えられる。しかしながら、Johnson（1972）は沖縄島におけるナミエガエルの生態（Johnson, 1969）と異なることを認めながら記録している。したがって、1965年には実際にナミエガエルがいた可能性もまた高い。1972年にはウシガエルにすみ場所を奪われて見当たらなかったのだろうか。今後の詳しい調査が必要である。

岡田（1930：175）は、“アオガエル *Rhacophorus viridis*” (=オキナワアオガエル *Rhacophorus viridis viridis*) の分布地として初めて久米島をあげている。しかし、分布表（第五表）には記されてない。Okada（1931）には本文中にも分布表にも久米島は掲載されていない。岡田・木場（1935）、Okada（1966）には分布地としてあげられている。また、Johnson（1972）もあげているが、採集記録はない。これらの文献は直接、または間接的に岡田（1930）を引用したものと推測される。このように、標本に基づく久米島からの確実な分布記録は今のところ無いが、緑色をしたカエルを樹上でみると地元の人々が話していたので、今後本種の出現期を考慮した調査が必要と考えられる。

爬虫類

城間伴氏（私信）によると、渡嘉敷島におけるハブ調査中によくリュウキュウヤマガメを見掛けとのことである。地元の人も生息していると話しているので、本種が分布しているのは確実と思われる。

バーバートカゲの分布域に今回新たに久米島が加えられた。今回採集された久米島産の2個体は、後鼻板を欠いている。沖縄島産の本種にも後鼻板を欠くのが約半分近くみられる（当山ほか、1973）ので、今後の調査によって、後鼻板を備えたものが久米島から採集されると思われる。

久米島では、バーバートカゲとオキナワトカゲの両種が宇江城岳で採集されている（Fig. 7）が、バーバートカゲは自然が残されている森林域でみつかっているので、両者はすみわけているものと推測される。

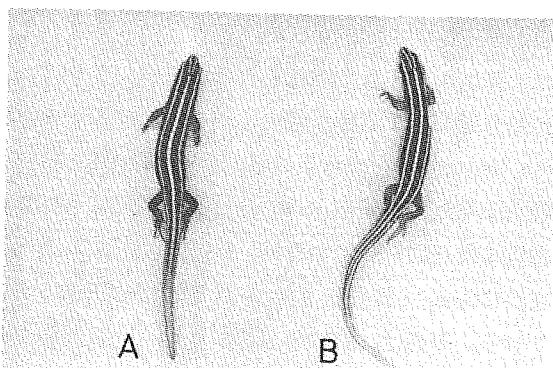


Fig. 7 Dorsal view of *Eumeces barbouri* (OPM H 452 : A) and *Eumeces margininatus marginatus* (OPM H 569 : B) from Kume-jima Island,

オキナワトカゲは、調査期間中に目撃した個体数は極めて少なかった。久米島には、1967年10月から1968年1月までの間に537頭のホンドイタチ *Mustela sibirica itatsi* が移入されており（Uchida, 1969）、座間味島や慶留間島の例（当山, 1983a）と同じくオキナワトカゲがイタチによって捕食され、減少したことは大いにありうる。

サワヘビ属の分布について、中国から東南アジアにかけて *andersonii*, *annamensis balteata guangxiensis*, *jacooi*, *kuatunensis*, *lateralis*, *latouchii*, *maxwellii*, *pre-*

maxillaris, *spenceri*、スマトラに *rugosa*、ボルネオに *typca*、フィリピンに *alcalai* 等が知られている。本属が西アフリカから記録されていることについては、採集場所の誤認の可能性があるとされている（Pope, 1935）。本属に属する諸種の間には、頭部の鱗相（特に上唇板）に大きい差が認められる（浙江医科大学ほか、1980）が、キクザトサワヘビの上唇板数、および体鱗列数はサワヘビ属でも最少ない数値を示している。

キクザトサワヘビの採集地についてのこれまでの情報を整理すると、生活の場が渓流であるのは明らかである。渓流に生息するという特殊な生活様式を有するヘビ類は、国内では本種の他にみあたらない。しかしながら、生活の内容はほとんど知られていないので、今後、生態的な調査が必要である。

久米島全域の河川を注意深く調査をしたが、筆者の感じでは白瀬川以外にはキクザトサワヘビが生息している可能性のある川は無いようにみえた。また、白瀬川でも生息に適していると思われる場所は、全長1kmに満たない一支部しかなかった。これまでに得られたわずか3個体の標本が同一地点で採集されていることは、限られた生息地を裏付けるものである。絶滅の可能性は極めて高いと考えられるので、早急に適切な保護措置の取られることが望まれる。

謝　　辞

調査補助員として協力された佐藤文保、岩附信紀、黒住耐二の各氏に感謝する。現地の方々には間込み調査で協力していただいた。また、琉球大学名誉教授池原貞雄博士には、調査の援助をしていただいた。喜久里教達、城間伴、田中聰、宮城邦治の各氏には情報を提供してもらった。ほか貴重な標本を提供していただいた方々、そして本稿をまとめるにあたって御教示をいただいた大阪市立自然史博物館柴田保彦、京都大学松井正文、疋田努の各氏に感謝の意を表わす。なお、1982年度の調査は昭和57年度文部省科学研究費補助金奨励研究（B）No. 57917049によるものである。

文　　献

- 池原貞雄, 1974a. 慶良間群島 の陸上脊椎動物. 沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告: 187-199. 沖縄県.
- 池原貞雄, 1974b. 久米島の陸上脊椎動物. 沖縄自然研究会調査報告第1号, 久米島県立自然公園候補地学術調査報告: 89-98. 沖縄県.
- Johnson, C. R., 1969. Herpetofauna of Okinawa, Ryu Kyu Islands. *Herpetologica* 25 (3) : 206-210.
- Johnson, C. R., 1972. Notes on the Herpetofauna of Kume-jima and O-jima, Ryu Kyu Islands. *Atoll Res. Bull.*, (162) : 7-8.
- Okada, Y., 1927. A study on the distribution of tailless batrachians of Japan. *Annot. Zool. Japon.*, 11 (2) : 137-144.
- 岡田弥一郎, 1930. 日本産蛙総説. 岩波書店, 東京.
- Okada, Y., 1931. The tailless batrachians of the Japanese Empire. *Imp. Agric. Exper. Stat.*
- Okada, Y., 1966. Fauna Japonica: Anura(Amphibia). *Biogeogr. Soc. Japan.*, Tokyo.
- 岡田弥一郎・木場一夫, 1935. 沖縄島及びその近接島嶼の脊椎動物目録. 沖縄博物学会会報, 1 : 3-22.
- Pope, C. H., 1935. The reptiles of China. *Natural History of Central Asia*, 10. Amer. Mus. Nat. Hist., New York.
- 高良鉄夫, 1962. 琉球列島における陸棲蛇類の研究. 琉球大学農家政工学部学術報告,(9): 1-202.
- 高良鉄夫(編), 1972. 風樹館要覧=付展示物目録=. 琉球大学農学部, 80p.
- 当山昌直, 1981. 沖縄群島の両生爬虫類相(I). 沖縄県立博物館紀要, (7) : 1-8.
- 当山昌直, 1983a. 沖縄群島の両生爬虫類相(II), 一座間味村の両生爬虫類一. 県立博物館調査報告書III一座間味村(ざまみそん)一, 16-22.
- Toyama, M., 1983b. Taxonomic Reassignment of the Colubrid Snake, *Opheodrys kikuzatoi*, from Kume-jima Island, Ryukyu Archipeago. *Jpn. J. Herp.* 10 (2) : 33-38.
- 当山昌直・前田敦・小浜継雄, 1973. 沖縄本島のバーバートカゲについて. 琉球大学生物クラブ誌, 12 (1) : 1-8.

- 当山昌直・城間伸・佐藤文保, 1983. ホルストガエルの渡嘉敷島からの記録. AKAMATA,(1):3.
- Uchida, I., 1969. Rat-control procedures on the Pacific island, with special reference to the efficiency of biological control agents. II. Efficiency of the Japanese wasel, *Mustela sibirca itasi* Temminck & Schlegel, as a rat-control agent in the Ryukyus. J. Fac. Agr. Kyushu Univ., 15 (5) : 355-385.
- 浙江医科大学・中国科学院成都生物研究所・上海自然博物館・浙江省中医研究所(編), 1980.
中国蛇類図譜. 上海科学技術出版社, 上海.

山内盛彬旧蔵「御拝領野村工工四」について

宜 保 栄治郎*

昭和57年（1982）10月4日に山内盛彬先生が所蔵していた「御拝領工工四」が県に寄贈され、それが現在県立博物館に保管されている。寄贈の経緯についてはその翌日の沖縄タイムス、琉球新報に詳しく紹介されている。随行して来た池宮正治琉大教授のメモによると次の通りである。

「御拝領工工四」について

- 1、1867年尚泰王の意向を受けて編集され、1869年に野村安趙（1805～1872）、松村真信（1831～1898）によって完成されたもので、野村風工工四とも欽定工工四とも言う。
- 2、おそらくこの時、若干部が書写され、尚泰王に一部献上された他野村、松村、「琉球見聞録」の著者喜舎場朝賢（1840～1916）といった御側仕グループにも所持されたと推測されるが、今日知られるのはこの一本だけである。
- 3、本工工四是尚泰王の御側の一人であった山内盛彬先生の祖父山内盛喜（1842～1916）が所持伝來したものである。
- 4、本工工四是、今日の野村流、安富祖流三絃楽の直接のもとになるもので、実際の上演上も、研究上ももっとも権威のあるテキストである。
- 5、この時編纂されたのは上中下三巻（3冊）で、各巻の内容は概略次のようにになっている。

上巻——大里王子尚惇の序、楽統銘々伝、絃声の巻、凡例、目録があり、以下「かじやで風節」以下37曲の端節が収められている。

中巻——目録、工工四是作田節以下26曲で、昔節を中心に収められている。

下巻——目録と、工工四是千瀬節以下87曲で、二揚曲、踊節、早節などが収められている。

- 6、湛水流工工四と御拝領「工工四拾遺」は、明治5（1872）年頃、同じく松村真信によって編集されているが、原本は所在不明。

次に当日同じように随行した教育庁文化課の大城學専門員のメモとして次のような記録がある。

山内盛彬所蔵 琉球音楽関係文献目録

- (1) 工工四 上巻 山内家 （野村風） 御拝領野村 68墨付
- (2) 工工四 中巻 山内家 （野村風） 65墨付
- (3) 工工四 下巻 山内家 （野村風） 御拝領野村工工四 71墨付
- (4) 知念績高著 工工四 一名芭蕉紙工工四 40墨付 前後脱落 小破
- (5) 湛水流工工四 全 具志頭 証 21墨付
- (6) 屋嘉比工工四 大正元年10月 山内盛彬 山内盛彬の手書き

（★ぎば えいじろう 県立博物館副館長）

- (7) 工工四 中巻 67墨付 野村風工工四の写しである。山内盛彬の書き込みがある。
- (8) 松村真信著 三味線段ノ物 工工四 全 活字本
- (9) 手登根順寛著 琴譜 上巻 活字本 明治28年刊
- (10) 手登根順寛著 琴譜 下巻 活字本 明治28年刊
- (11) 琉球楽典 工工四 下巻 大城活版社 発行
- (12) 琉歌百控 乾柔節流 大正3年卯月写 山内盛彬 以上12冊

以上が当日使用され両新聞社の記事のもとになった資料である。当館に贈られた12冊の中から特に重要と思われる「野村流御拝領工工四」の上・中・下巻を順を追って紹介したい。

上巻の目次は

「夫歌者人情嗟嘆の……」同治八^{己酉}年（1869年・明治2年）大里王子尚惇謹誌

附録 「夏氏湛水親方ハ………」

「絃聲乃巻」 奥書「干時天明^{己酉}仲秋吉旦^{庚午}二月 毛氏野村安趙書」

凡 例

工工四目録

上巻 カギヤデ風節外36節

中巻 作田節外26節

下巻 千瀬節外86節

となっている。

この目次を県立博物館にある山内家所蔵本（以下山内本と略称）と野村流音楽協会にある仲真家所蔵本（以下仲真本と略称）を比較すると次の点に違いがある。

ア 附録の末尾について

山内本 「干時天明^{己酉}仲秋吉旦 同治^{庚午}二月 毛氏野村安趙書」

仲真本 「干時天明^{己酉}仲秋吉旦」とだけ書いてある。

注 山内本の末尾に野村安趙の署名があるので山内本が野村流工工三と呼ばれる理由であろう。

イ 下巻の工工四目録の中で

山内本には百名節と荻堂口説の下段（次）に古見浦節がある。

仲真本は荻堂口説の下段（次）は空欄になっている。

ウ 節名の表記について （・印は筆者が便宜的に附す）

仮名表記

山内本はチャンナ節 ショトン節 ハヤリクワイニヤ節 シヤウンカナイと書き

仲真本はヂャンナ ショドン節 ハヤリグワイニヤ節 シヤウンガナイと濁音表記になっている。

漢字表記

山内本は仲間節 本散山節 芋之葉節と楷書の旧字体で表記してあるのに対し

仲真本は仲間節 本散山節 芋之葉節と楷行書体で表記してある。

エ 目録の表記について

山内本は上巻、中巻、下巻とのみ書いてあるのに対し

仲真本は上巻凡三十七節、中巻凡二十六節 下巻凡八十七節と節数を表記してある。

オ 山印（山印とは抽象化した文様を印鑑の代りにしたもの）

山内本には山印が無く

仲真本には節名の下に必ず山印が押してある。

以上からしてこの二つの本は基本的にはひじょうに似ていて兄弟の間柄にある本であると推定される。

次に私が最も興味のある歌詞をとりあげてみる。

山内本上巻の歌詞（但し絃の右側にカタカナ表記されたものを琉歌表記の上句、下句にまとめた。さらに拗音など二字、また三文字を一音で発音するものについては～をつけた。）

カギヤデ風節

ケフノホコラシヤヤ ナヲニギヤナタテル
ツボデヲルハナノ ツユキヤタゴト
ヤウンナ ハレ ツボデヲルハナノ
ツボデヲルハナノ ツユ キヤタゴト ヤウンナ

恩納節

ヲンナマツシタニ ヤレヤレヤウ
キジノハイノタチユス ソヤソヤ
コヒシノブマデノ ヤレヤレヤウ
キジヤナイサメ ソヤソヤ

中城ハンタ前

トビタチユルハハル マジョマテツレラ ソレ
ハナノモトワミヤ シラヌアモノ

コティ節

トキハナルマツノ イヤイヤ ワムザウガヤウ
カハルコト ナイサメ イヤイヤ ワムザウガヤウ
イツモハル ヒエマタ クレバ アノシホラヤウ
イロドマサル フイ オレサメ ニヤオレサメ
シホラ チヤンナヤウ ハイヤ
オレサメ シホラ ヤウ フイ

謝敷節

ジヤジキイタビセニ ウチヤイヒクナミノ ヤイオナイ

ジヤジキミヤラベノ ナ メハライハグキ
オナイ ヤエイ シホラヤウ

早作物節

ハルヤハナザカリ ミヤマウグヒスノ ツヤウンツヤウン
ニホヒシノデホケル コエノシホラシヤ

金武節

コバヤキンコバニ ダケヤアフソダケ
ヤ子ヤシラカキニ ハリヤヲンナ
ヤウンナヤウ

平敷節

ゲンカハリカハヤ ウシホカユカミヅカ
ゲンカミヤラベタガ ナコノミヤラベタガ ナソレ
オソデドコロ サヨイサ ツユタ シヤントシイ

白瀬走川節

シラセ ヤウ ハリカハニ ハレ ナガレヤウユルサクラ ハレビエヤルガヒエ
スクテ ヤウ オメサトニ ハレ ヌキヤイ ヤウ ハケラ ハレビエヤルガヒエ

クニヤ節

クニヤノホソナベガ ナドハタカナチユテ
ハキテクゴ ヤウ オワイベト ヤウ チヤソヒソワマイ サユ ヤウンナ

邊野喜節

イジユノキノハナヤ ヒエヤルガ アンキヨラササキユリ
ワミモムジユヤトテ ヒエヤルガ マシラサカナ ヤウンナ

大兼久節

ナゴノオホガ子ク ソレ ウムマハラチイシヤウシヤ
フ子ハラチイシヤウ シヤ ソレ ワウラドマリ
ヤウンナ ササ ヤウテバ ヤウンナ

仲村渠節

ナカムカリ ヤウ ソバイド ソレ マスダレハ ヤウ サゲテ
アニヤラハモ ヤウ トマバ ソレ シノデ イマウレ

ヤウ サユ ヤウンナ

湊原節

ウチナラシ ヤウ ナラシ ピエヤルガヒエ
ヨツダケハ ヤウ ナラチ ヤウ シホラ ジヤンナヤウ
ケヨヤオザ ヤウ イムヂテ ヒエヤルガヒエ
アヌブウレ ヤウ ウレシヤ ヤウ シホラジヤンナヤウ

出砂節

ムザウヤウ イデスナノイベヤ
アシタレノヤウ イヅミダチモタヘル
ムザウヤウ オメゴハダチモタヘル
アシタレノヤウ トノチサトノシ
ヤウオナイ カサモチ ミヤラベキヨラサノヤウ

仲順節

ワカレテモタガヒニ ゴエンアテカラヤ コレミンデ オメサトヤウ
イトニヌクハナノ チリテノキユメ コレミンデ オメサトヤウ

仲間節

ワガミツデミンチド ヤウ ヨソノウエヤシユル
ムリスルナウキヨ ナサケバカリ ヤウンナ

本散山節

チカサタルガケテ サヤレ ユダンドモスルナ ヤウ
ウメノハヤハナノ サヤレ ニホヒヤシラヌ サ サユヤウンナ

チルレン節

コハムマガソロテ 子ガタゴトカナテ
オホ~~ム~~シノヤウ ピヤクサイ オヨワイシヤベラ
ヤウサテモヤエ コナイ ハイ チルレン チルレン サヤチルレン
コノヒヤウシノ ナニガシ アシユントウ ヲドレバ コナイハイ
チルレン チルレン サヤチルレン サヤチルレン

坂本節

サカモトノイベヤ ヤウオナイ コナイ
ダンヂヨトヨマレル ヤウオナイ コナイ

ヨヨギヨラガチウモト ヤウオナイ コナイ
コバノミモト サユヤウンナ

伊江節

ソレ アガリウチムカテ ヤレ トビユル ヤウ ヒエヤ
ソレ アヤハベル ヒエ ヤウ
ソレ マヅヨマテハベル ヤレ イヤリ ヤウ ヒエヤ
ソレ モタサ ヒエヤウ

石ノ根道節

イシッ子ノ ヤウ ミチカラ テラノソバ ハレ マデモ
アガソミヤウヤウ ハレ オナイ サンサツ オナイシタ

本部長節

ケンシヤシユシ ヤウ タレマヘ ヤア ヤレヤ
オトリツギシヤベラ サ ハイソレヤウ

本田名節

ムザウ スン子クリフ子ノ ヤウ
イキユルトカイヤレバ オナイ
ケフ^フヤムヂヲガデ ヤウ
アチヤヤキユスガ ハレ ヤウンナ

大田名節

オホダナノヨメヤ ナイボシヤヤアスガ ヒエヤ ソレ
イシヤラアサミチノ クミノアグデ ヤウ ムザウ ヤウ

アガサ節

ミヤマ ヤウ クボ ヤウ ダインス
カスカ ヤウ ケテオチヤイイ
ヒエヤ オメシホラ ジヤンナヤウ
ワヨイナ ヤウ ゴニ ヤウ ナトテ
ユダン ヤウ シヤベメ ヤウンナ
ヒエヤ オメシホラ ジヤンナヤウ

瓦屋節

カラヤツヂノボテ マハイムカテミレバ

シマノラドミユル サトヤミラヌ ヤウテバ

赤サクハデサ節

アカサクハデサヤ ミオドントタンカ
タマコガ子ムザウヤ ワミットタンカ
サ ワミットタンカ

芋之葉節

イムモノハノツユヤ ハエエ ヒエヤルガ
マダマヨカ キヨラサ ヤウ
アカチヨ アグマキニ ハエエ ヒエヤルガ
ヌキヤイハキヤイ ヤウンナ

踊クハデサ

クハデサノオツキ サアサヘンソル サヘンソルサヘ
マドマドドテユル サアサヘンソル サヘンソルサヘ
ヨソメマドバカテ シノデイ サア イマフレ

真福地之ハイチヤウ節

マフクヂノハイ チヤウヤ オメシホラヤウ
カレナモノサラメ オメシホラヤウ
イキメグリメグリ オメシホラヤウ
モトニツキヤサ オメシホラヤウ

花風節

ミグスクニノボテ ヤウ テサギモチヤゲレバ ヤウ
ハヤフ子ノナライヤ ヤウ チュメドミユル ヤウンナ
ハヤフ子ノ ヤウナライヤ

本花風節

ミグスクニノボテ ウチマ子クアヲギ
マタモメグリキテ ムスブゴエン ヤウンナ
マタモメグリキテ ヤウ マタモメグリキテ
ムスブゴエン ヤウンナ

本嘉手久節

ミルハナニソデヤ ヒキヨトメラレテ ヤウ

ツキノヌキヤガテド モドティキユ やウ シホラ

ゴエン節

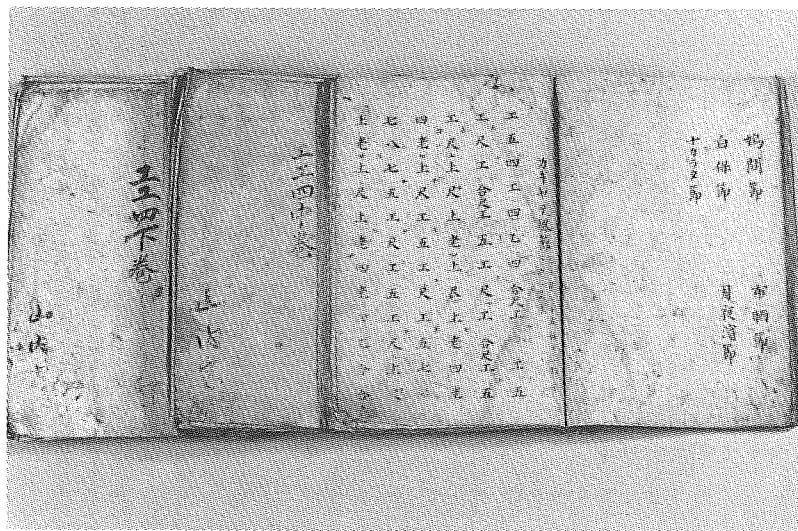
ゴエンアテオトギヤ シホラヤウ
イキヤテウレシサヤ ヒエヤ オメシホラ ジヤンナヤウ
ウチハレテアソベ シホラヤウ
ワミヌモ アソアソバ ヒエヤ オメシホラ ジヤンナヤウ

ツナギ節

アタイヲヤ やウ ウムミヤイ シホラ
ハタイン やウ ヌノヲヤイ ヒエヤヤウ シホラジヤンナヤウ
タマコガ子サトガ シホラ
ミシヨヨ やウ スラニ ヒエヤヤウ シホラジヤンナヤウ
サテ ムザウ シホラ ジヤンナヤウ

揚作田節

ユタカナルミヨノ シルシアラハレテ
アメツユノメグミ トキモタガヌ



御拝領野村工工四

〈資料紹介〉

辞令書等古文書調査報告書補遺 (二)

上江洲 敏夫

(うえず としお 県立博物館学芸員)

首里王府が発給した辞令書が、中央集権的国家制度が確立された尚真王代の十六世紀にまで溯ることは、現存の辞令書で確認される。辞令書は、役人や神女をある特定の役職に補任したり、ある位階に叙任したり、あるいは知行地や知行高を安堵したりした場合に発給されたもので、薩摩の島津氏が侵入する一六〇九年(慶長十四)以前の古琉球辞令書の形式については高良倉吉氏が詳述している(「古琉球辞令書の形式について」『沖縄史料編集所紀要』第三号所収、一九七二年)。辞令書の様式が仮名から仮名交り、十七世紀後半以降は画一的漢文表記へと変遷・定着していくことは別稿で述べておいた(「辞令書の古文書学的考察」『辞令書等古文書調査報告書』沖縄県文化財調査報告書 第十八集。一九七九年)。

教育厅文化課在勤中の辞令書調査の時点で判明しなかつたことが、新たに確認により、辞令書の様式の変化時期が次第に明確になつてきたので、まずその点を明らかにし、修正しておきたい。

文化庁の国庫補助事業の一環として、昭和五十三年度に実施した「辞令書等古文書調査」では、辞令書の悉皆調査を期して現存の辞令書と亡佚した辞令書を集大成する形をとつたが、その後現存・亡佚辞令書が確

認された。その際、前掲の報告書の中に収録した拙稿の中で、辞令書の発給年月日に干支が書き加えられるようになるのは、順治九年から順治十六年の間であろうと述べた。その根拠として示したのは、調査当時に確認された干支が入らない最も新しい辞令書が順治九年で、干支入りの最も古い辞令書が順治十六年という点に尽きる。ところが、図版②に示した順治十五年の辞令書には干支が入っていない。したがって、先に示した、干支の入らない最も新しい辞令書の年限は、順治十五年に修正する必要がある。その結果、首里王府が発給した辞令書は、順治十五年七月までは干支が入つてなく、同八月から翌順治十六年六月の間に、干支を書き入れたことになる。念のため両辞令書を次に掲げておく。

首里乃御美事

金武間切の

おんなのろハ
本のろ之子
一人ませに

たまわり申候

順治十五年七月廿八日

首里乃御美事

渡名喜鳴

大屋子ハ

（大屋子に？）
一人志よ里の
申候

たまわり

□（順）
治拾六年己亥六月十五日

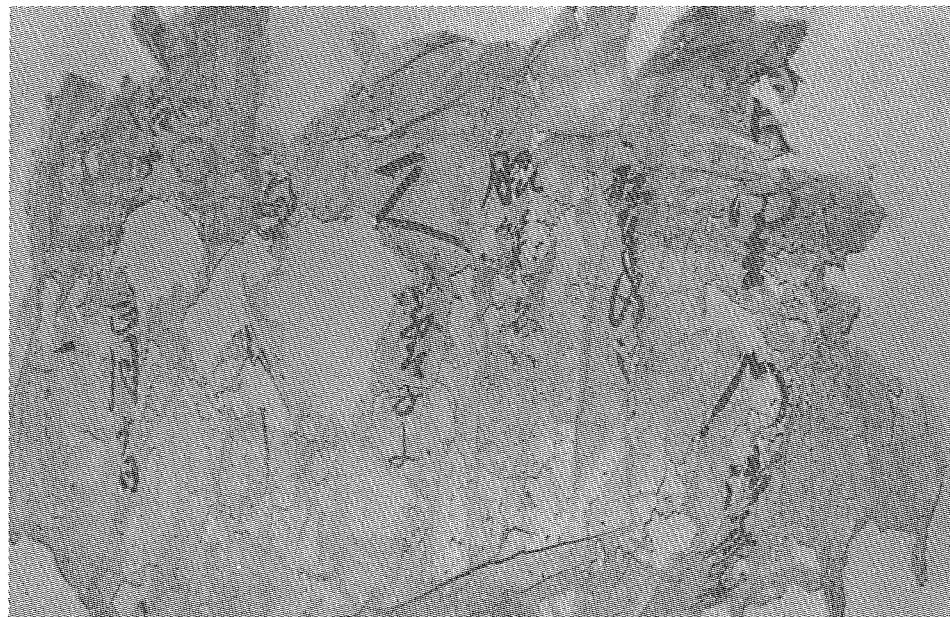
辞令書に干支を書き入れた理由は判明しないが、『球陽』の順治十五年条（尚質十一年）には、漏刻門に巨鐘を懸けて時候を報じた記事と、上天妃・下天妃宮でも朝夕に鐘を撞いて時刻を報じたことが見えている。直接の関連性はないかも知れないが、時の意識が底流にあるという観点では、若干のつながりも考えられよう。

次に、仮名交り文から漢文へと表記の様式が変つたことについて触れておきたい。前記調査で確認した仮名交り表記の最も新しい辞令書は順治十七年で、漢文表記の最も古い辞令書は康熙十年であった。ところが図版③で示したように康熙五年の仮名交り表記辞令書が確認され、漢文表記への変化は康熙五十年の間であることが判明した。その上、注目すべきことは、康熙六年（尚質二〇、一六六七）に、それまで貴賤重輕にかかわらず官職受賜の際に発給していた辞令書が、賤官・軽職への発給を中止し、高官・重職にのみ発給するという制限が加えられ、辞令書の大幅改定がなされている。傍証資料もなく断定はできないが、この年に仮名交り表記に改められた可能性は強い。

図版として収録した辞令書について若干説明しておきたい。まず、図版①・③・⑥三通の辞令書は、当間恵喜氏からの連絡を受けて、昭和五

十八年十一月十四日、宜野座村教育委員会の協力を得て琉球大学教授池宮正治氏と一緒に調査したものである。この三通は宜野座村の許田正元氏宅（同村字松田二六二八一一）に伝存したもので、辞令書のほかに「郭氏家譜」、郭氏家譜仕次、生子証文、許田村名寄帳の断簡等も確認された。これらは昭和五十九年三月十五日付で同村指定文化財に指定されている。②は首里城内北殿にあつた郷土博物館で展示されたこともあったらしいが、現在は所在不明。④・⑤・⑧・⑨・⑩・⑬・⑯・⑰の八通は『伊江村史』に収録されたものであるが、④は昭和四十七年に開催された「沖縄復帰記念・その文化と歴史 琉球王家秘宝展」図録によれば伊江朝雄氏の所蔵となっている。おそらくその他の辞令書も同氏の所蔵であろう。なお、右の図録には、「道光十四年甲午十二月十九日」・「同治十一年壬申八月二十五日」・「同治十一年壬申九月二十日」の辞令書も出品されたことが同目録によつてわかる。⑦は那覇市史編集室所蔵。
⑪は川平朝申氏（那覇市首里崎山町四一六五）所蔵。⑫は現存していると思われるが未確認。⑭は本村敏子氏（平良市下里五九七）所蔵。⑮・⑯・⑰は東恩納千鶴子氏が「南風原文書」（那覇市・南風原家蔵）として紹介したものであり、現存していると思われるが未確認。⑯は中村直勝氏が収集した古文書として紹介されたものであるが、現存しているかどうかは不明（山里純一氏提供）。⑯は「長栄氏家譜」の中に収録されたものである（波名城泰雄氏提供）。⑮・⑯はノロ職補任辞令書であるが、いずれも現物は確認されていない。⑰も郷土博物館で展示されたことがわかるが、現物は存在しない。⑱は久米島の神女である君南風の後任辞令であるが、現物は存在しない（新城敏雄氏提供）。

末筆ながら資料を提供していただき皆様に、記して感謝の意を表する次第である。



① 船奉行脇筆者職補任辞令書

首里乃御美事

船奉行之

脇筆者ハ

一人やふそ子に

たまわり申候

順治十年正月十日

法量
縦二六・一 cm
料紙 唐紙

横三八・七 cm

首里乃御美事

金武間切の

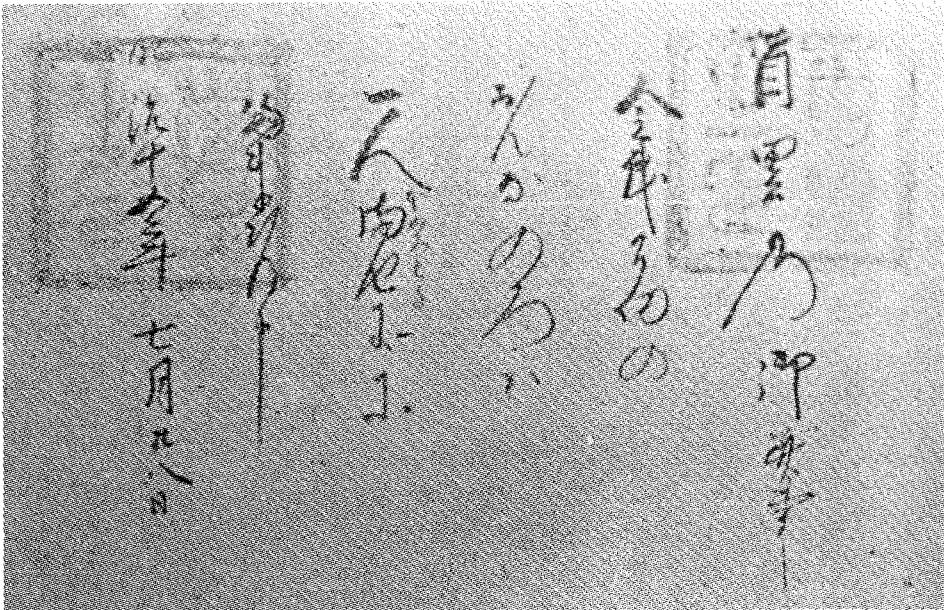
おんなのろハ

本のろ之子

一人ませにに

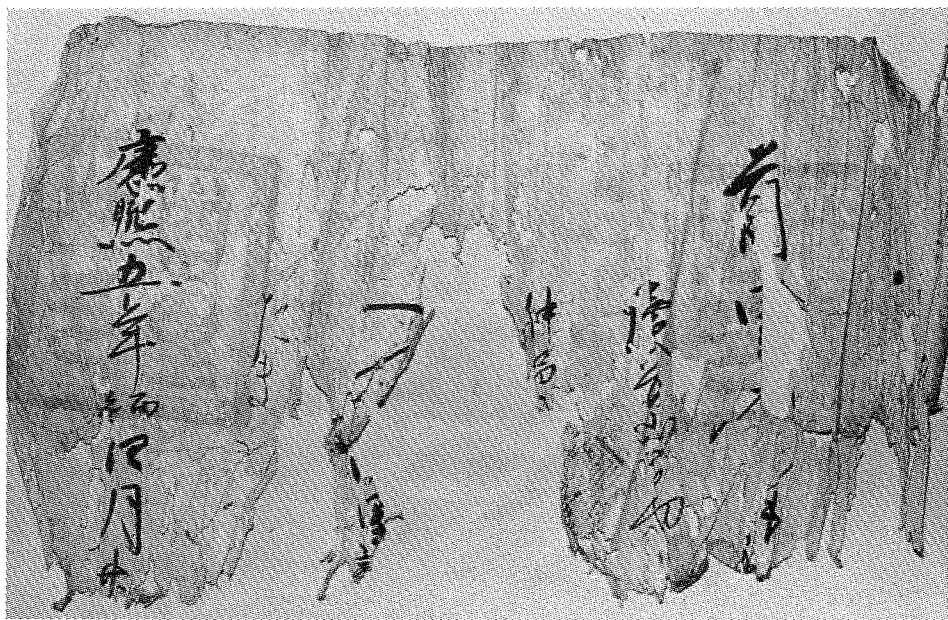
たまわり申候

順治十五年七月廿八日



② 金武間切の恩納のろ職補任辞令書

〔備考〕島袋源一郎『伝説浦遺沖縄歴史』所収
一九五二年初版本口絵写真



③ 讀谷山間切の仲邑里主所安堵辞令書

首里乃御 (美事)

讀谷山間切

仲邑 (里主所ハ)

一人中里 (親雲上に)

たまわり申候

康熙五年丙子四月廿 (三日)

法量 縦二〇・三 cm
料紙 唐紙

宜野座村指定文化財

横二九・〇 cm

首里之御詔

伊江鳴惣

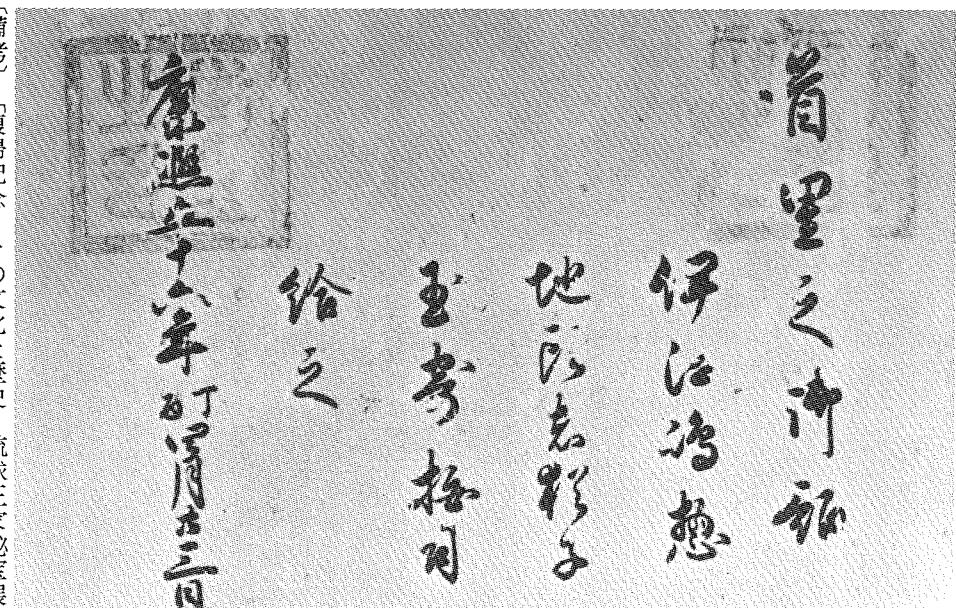
伊江鳴惣

地頭者猶子

玉寄按司

給之

康熙五十六年丁酉四月廿三日



(4) 伊江島總地職補任辭令書

〔備考〕 「復帰記念・その文化と歴史 琉球王家秘宝展」

〔尚姓家譜〕

〔図録所収〕

六世朝良 伊江按司
康熙五十年辛卯八月十八日結欵
康熙五十六年丁酉四月二十三日統家統任伊江島惣地
頭職並賜知行高百斛

首里之御詔

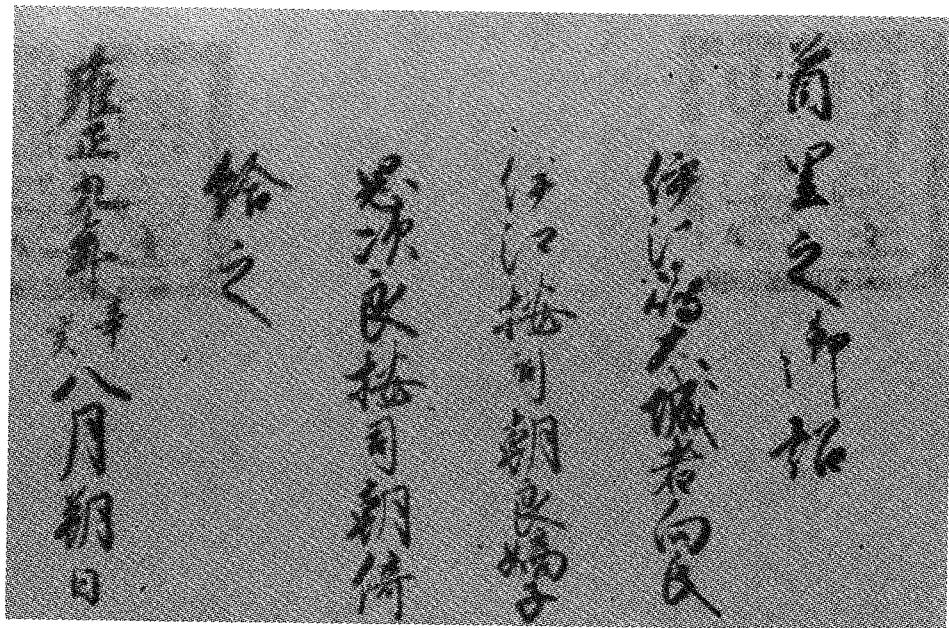
伊江嶋大城者向氏

伊江按司朝良嫡子

思次良按司朝倚

給之

雍正九年辛亥八月朔日



⑤ 伊江島の大城安堵辭令書

〔備考〕『伊江村史』上卷所収

「向姓家譜」

雍正九年辛亥八月一十七日結倚髻賜伊江島大城之名

首里之御詔

小祿間切赤嶺

里主所者郭氏

(嫡子)

思龜正惠

(給之)

(乾隆七年壬戌十二月十五日)



法量 縱三四・三 cm
横三一・〇 cm

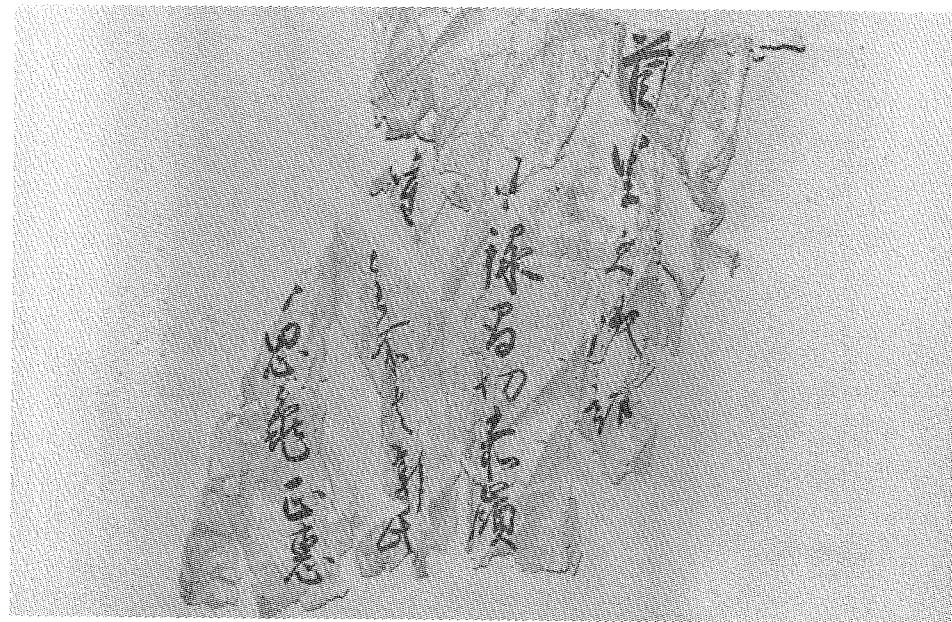
料紙 唐紙

宜野座村指定文化財

〔備考〕

〔郭姓家譜仕次〕

乾隆七年壬戌十二月十五日父為跡目小祿間切
賜赤嶺地頭職



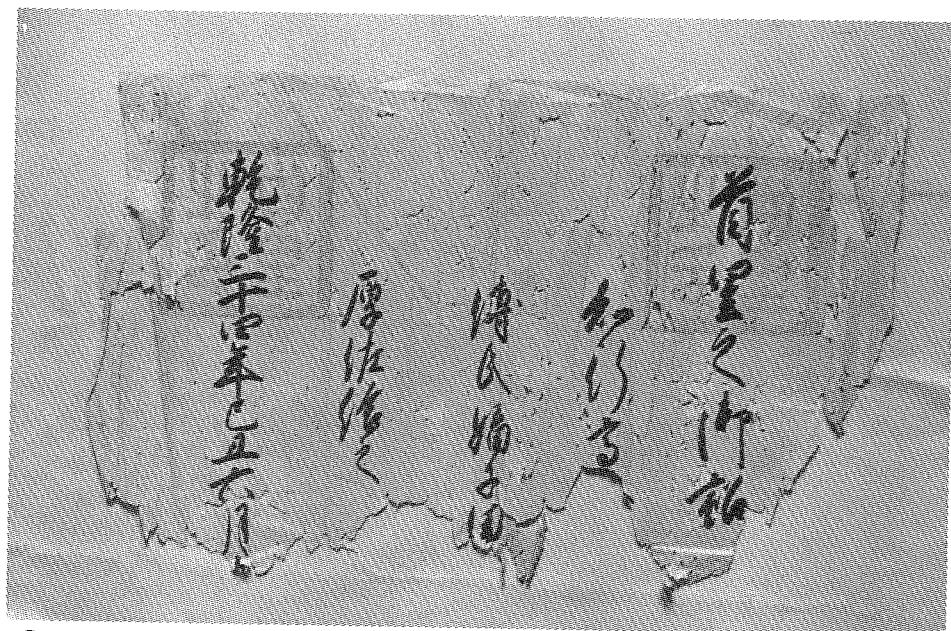
⑥ 小祿間切の赤嶺里主所安堵辭令書

〔備考〕

〔傳姓家譜〕

九世國樟（名乘厚佐）

乾隆二十四年己丑六月十五日賜知行高十五斛



⑦ 田崎里之子厚佐への知行安堵辞令書

首里之御詔

(拾五斛者)

知行高

傳氏嫡子田

(崎里之子)

乾隆二十四年己丑六月

(十五日)

厚佐給之

法量 縱二七・二
cm
料紙 橫四四・三
cm
唐紙

首里之御詔

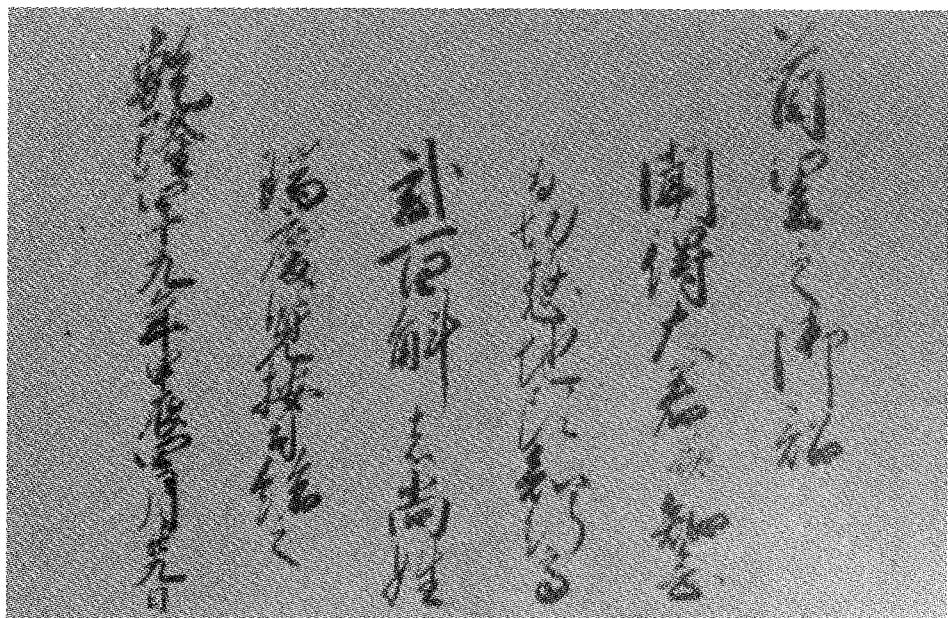
聞得大君并知念

間切惣地頭知行高

式百斛者尚姓

瑞慶覽按司給之

乾隆四十九年甲辰四月廿九日



⑧ 聞得大君職補任并知念間切惣地頭知行安堵辭令書

〔備考〕『伊江村史』上卷所收
「尚姓家譜」

七世朝倚

乾隆四十九年甲辰四月二十九日室尚氏任聞得大君
賜知念間切惣地頭職併知行高二百斛

首里之御詔

伊江嶋惣地頭并

知行高四拾石者向氏

嫡子真蒲戶金按司

朝要給之

道光七年丁亥七月卅日



(9) 伊江島惣地頭職補任并知行安堵辭令書

〔備考〕『伊江村史』上巻所収

「向姓家譜」

十一世朝要

道光七年丁亥七月三十日統父之家統任伊江島
総地頭職並賜知行高四十斛

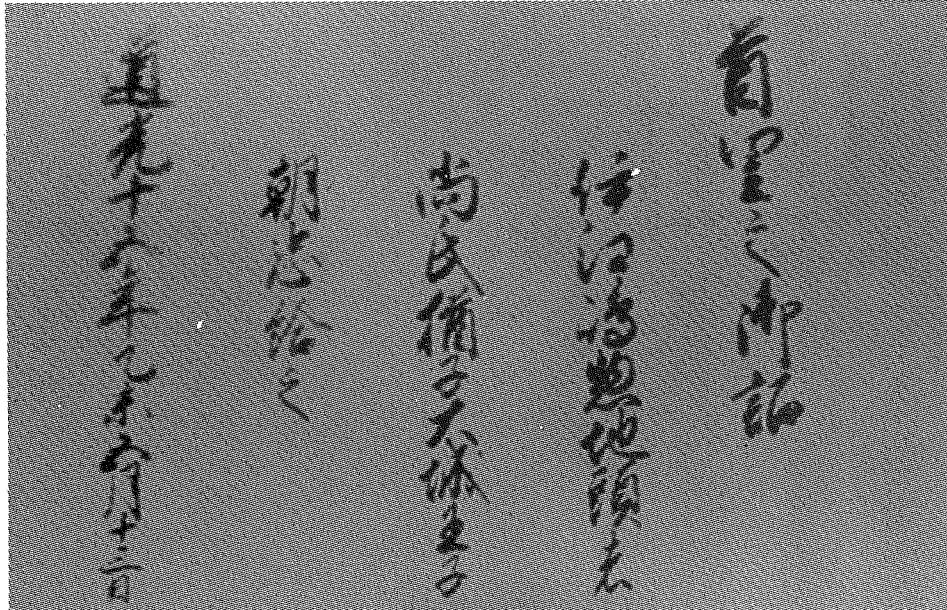
首里之御詔

伊江嶋惣地頭者

尚氏猶子大城王子

朝忠給之

道光十五年乙未五月十三日

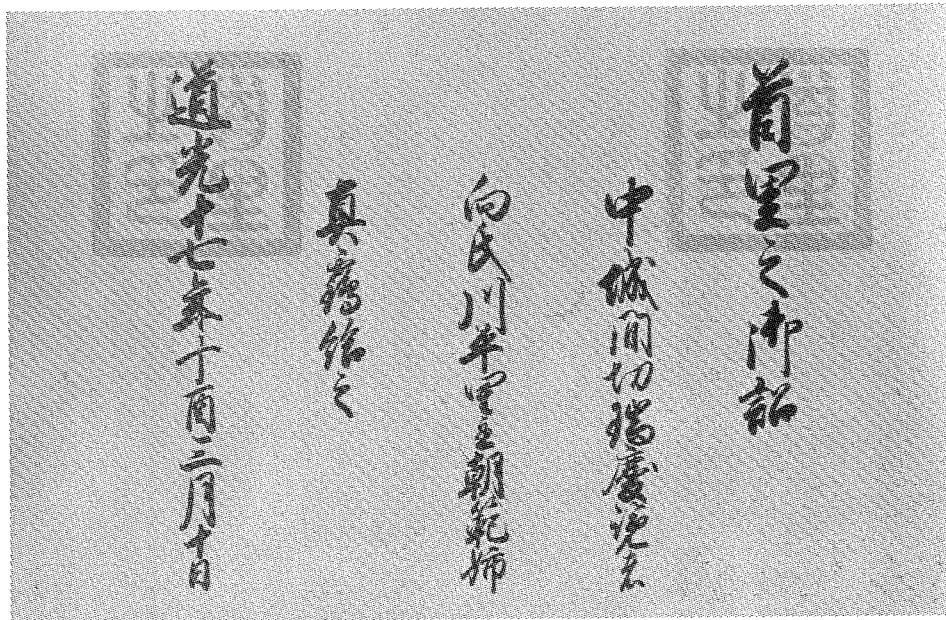


(10) 伊江島惣地頭職補任辭令書

〔備考〕『伊江村史』上卷所收
「尚姓家譜」

十一世朝忠

本年（道光十五）五月十三日統家統任伊江島惣地頭職



(11) 中城間切の瑞慶覽安堵辞令書

首里之御詔

中城間切瑞慶覽者

向氏川平里主朝範姉

真鶴給之

道光十七年丁酉二月十日

料紙
法量 縱三一・一
唐紙 cm

横四五・七
cm

首里之御詔

中議大夫者二男

首里之御詔

中議大夫者二男

金成勲豊里里之子

親雲上給之

道光十八年戊戌十二月廿七日

(12) 中議大夫叙任辭令書

〔備考〕具志堅以德「久米村の諸大夫」(『琉球の文化』第二号所収)
「金氏家譜」

十四世成勲

道光十八年戊戌十二月二十七日因冊封行賞陞中議大夫

首里之御詔

加増知高百斛者

尚氏伊江王子

朝忠給之

道光二十一年辛丑三月十五日

加増知高百斛者

尚氏伊江王子

〔備考〕『伊江村史』上巻所収

「向姓家譜」

十一世朝忠

道光二十一年辛丑三月十五日加賜知行高百斛都百斛合

首里之御詔

主古嶋頭下地

大首里大屋子者

尚裔氏狩俣首里

大屋子朝祥給之

咸豐元年辛亥二月癸酉

首里之御詔

宮古島頭下地

大首里大屋子者

尚裔氏狩俣首里

大屋子朝祥給之

咸豐元年辛亥二月廿六日

法量 縱二二·一 cm
料紙 唐紙 橫四五·六 cm

者是御詔

中議大夫者嫡子

首里之御詔

中議大夫者嫡子

毛克述奧間里之子親雲上

給之

咸豐二年壬子四月五日



⑯ 中議大夫叙位辭令書

首里之御詔

長史者嫡子

毛克述奥間

里之子親雲上給之

咸豐七年丁巳二月九日

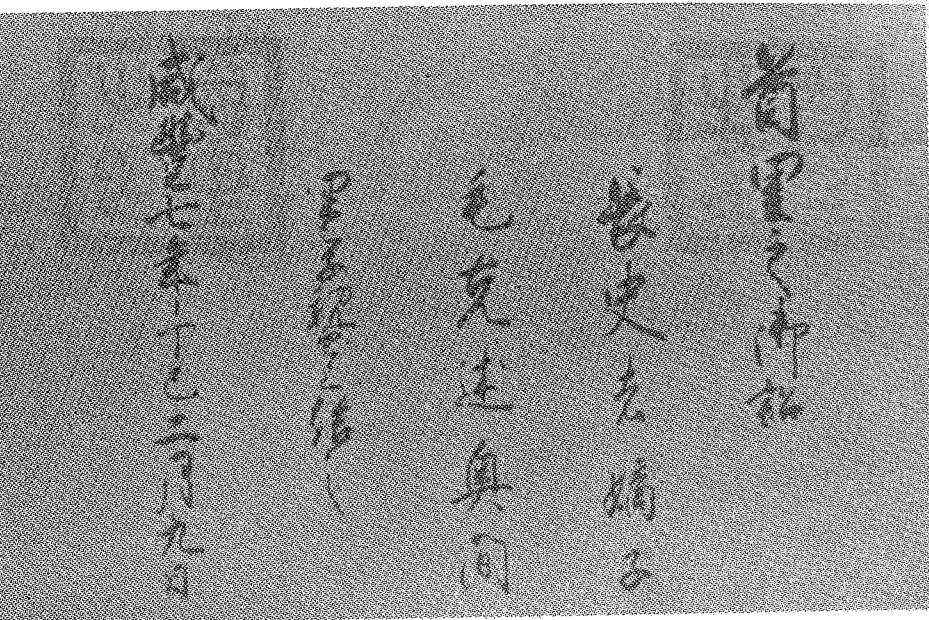
首里之御詔

長史者嫡子

毛克述奥間

里之子親雲上給之

咸豐七年丁巳二月九日



⑯ 長史職補任辭令書

〔備考〕東恩納千鶴子『琉球における仮名文字の研究』所収

首里之御詔

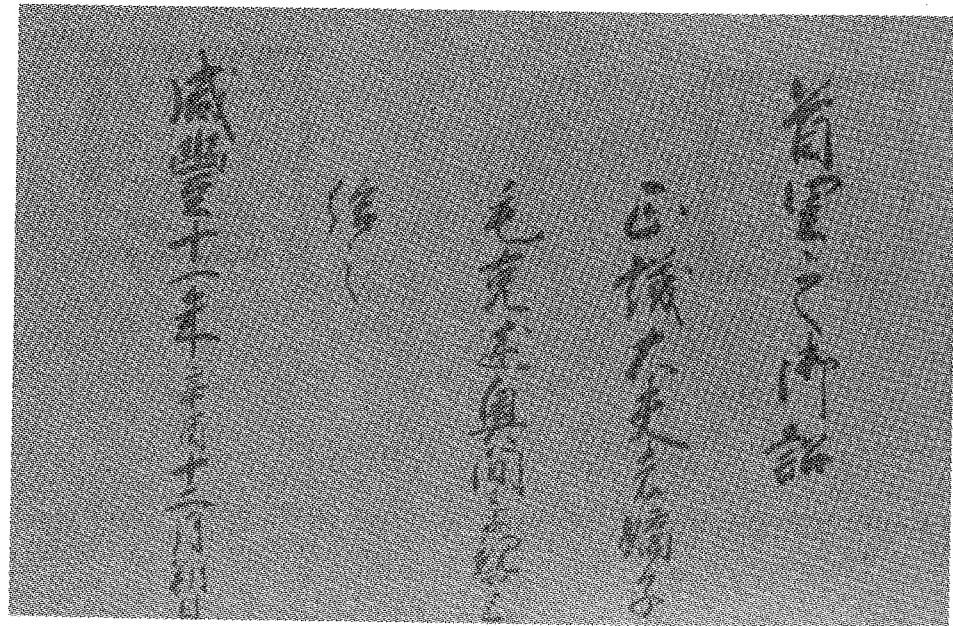
正議大夫者嫡子

毛克述奧間里之子親雲上

給之

咸豐十一年辛酉十二月朔日

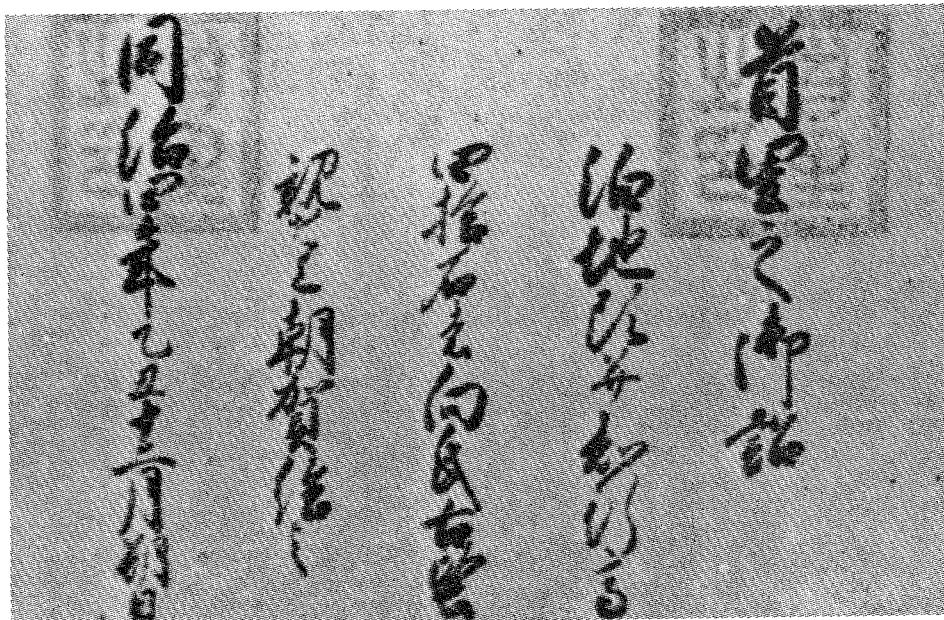
〔備考〕 東恩納千鶴子『琉球における仮名文字の研究』所収



(17) 正議大夫叙位辭令書

〔備考〕

『中村直勝博士蒐集古文書』所收



(18) 泊地頭職補任并知行安堵辭令書

首里之御詔

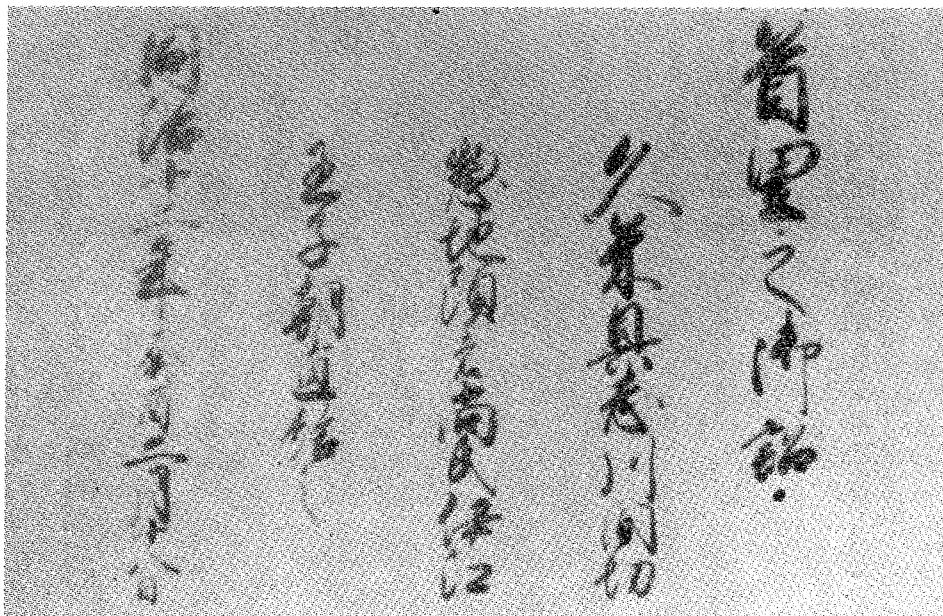
泊地頭并知行高

四拾石者向氏古堅

親雲上朝賀給之

同治四年乙丑十二月朔日

法量 縱三一·一 cm
料紙 橫四四·三 cm
不明



⑯ 久米具志川間切の惣地頭職補任辭令書

首里之御詔

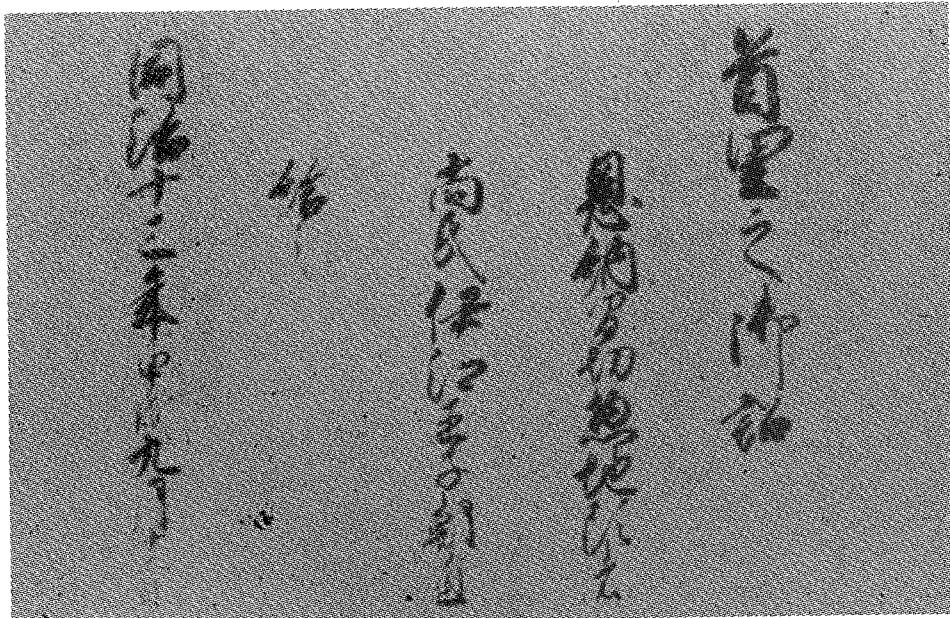
久米具志川間切

惣地頭者尚氏伊江

王子朝直給之

同治十二年癸酉二月十八日

〔備考〕『伊江村史』上巻所収



②0 恩納間切の惣地頭職補任辞令書

首里之御詔

恩納間切惣地頭者

尚氏伊江王子朝直

給之

同治十三年甲戌九月十一日

②0 八重山間切の石垣首里大屋子知行安堵辞令書

首里の御ミ事

八重山間切のいしかき村より

今帰仁間切の

知行高式拾石ハ

中城のろは

一人いしかきの志より乃大やこに

前のろ(アシテ)子
一人加那に

たまわり申候

たまわり申候

天啓五年十月十四日

隆武八年二月五日

〔備考〕

「長榮氏家譜」

天啓五年乙丑十月十四日知行高二十斛
恭敬頂戴聖君金印判左錄

〔備考〕東恩納寛惇『沖縄涉外史』

②1 今帰仁間切の中城のろ職補任辞令書

首里の御美事

一人いしかきの志より乃大やこに

一人加那に

たまわり申候

たまわり申候

(22) 中城間切のよきやのろ職補任辞令書

首里の御美事

(23) 御物奉行職補任辞令書

首里之御詔

御物奉行者向氏

棚原親方朝矩

給之

道光十八年戊戌二月朔日

よきやのろハ

本のろの姪

一人まふしに

〔備考〕『郷土博物館の栄』

(24) 久米島君南風職補任辞令書

首里之御詔

久米島君南風

あむしられ者女孫なへ

給之

順治拾八年辛丑正月十二日

同治六年丁卯六月二十二日

〔備考〕『よきやのろくもい伝来記』

よきやのろくもいへ押領御印判控

〔備考〕吉田東悟『大日本地名辞書』第八卷

沖縄県立博物館

沖縄県立博物館紀要

第 10 号

1984年3月20日 印刷

1984年3月31日 発行

編集・発行 沖縄県立博物館

〒903 那覇市首里大中町1の1

TEL (0988) 84-2243

86-4353

印 刷 近代美術株式会社

〒901-11 南風原町字兼城206

TEL (0988) 89-1514 (代)